総　論

第１章　歴史文化基本構想等の目的と位置づけ

第１節　歴史文化基本構想等の背景と目的

地域の歴史や特色を表し、古来様々な形態で存在・継承されてきた文化財については、地域の視点から総合的に把握し、地域住民の心のよりどころとして、その保存・活用を図ることが望まれる。

平成19年10月の「文化審議会文化財分科会企画調査会報告書」では、「歴史文化基本構想※1」及び「歴史文化保存活用計画※2」（以下「歴史文化基本構想等」と言う。）が市区町村において策定されることで、一定の方針に基づいた文化の薫り高い空間が形成され、地域の魅力の増進と活力の向上が期待されると提言されている。

こうしたことに基づき、文化庁においては、全国の市区町村において歴史文化基本構想等を策定することができるよう、その策定の指針を作成することを目的に、「文化財総合的把握モデル事業※3」が創設されている。これは、複数の地方公共団体がモデルケースとして歴史文化基本構想等の策定を行い、その方向性や課題等を明らかにすることが求められる事業であり、平成20年度に20件が選定されている。

モデル事業で策定する「歴史文化基本構想」の目的は、多様な地域文化の継承と地域活性化である。それを具体化する新たな考え方としては、「有形・無形の地域の文化財を相互の関連性のある一定のまとまり（関連文化財群）として捉え、総合的に保存・活用」するとともに、「文化財と一体となって価値をなす周辺環境も含め保護・整備（歴史文化保存活用区域）」することである。

津和野町も、この事業の意義と必要性を鑑み、特に以下の点を背景に文化庁に申請し、選定された。

○　未指定等の文化財に関する現状把握が十分できていなかった（見直しの機会）。
○　地域の文化的な宝（未指定等の文化財）を保存・活用する余地が多分にある。
○　過疎化、少子高齢化が進んでおり、地域の文化財の保護が難しくなりつつある。
○　津和野町の文化財や歴史文化の特質を見いだし、共有化する機会としたい。
○　かつての観光ブーム（昭和50年代）の時代の取組やイメージから、次の時代を見据えた展開を図る必要がある。
○　国・県・町の連携による先導的な文化財保護行政を推進したい。
○　公共工事に関わることなど、文化財保護行政と他の部門との連携が十分でない面がある。
○　歴史文化を生かしたまちづくりを進めたい。

こうしたことを踏まえ、本事業は、住民や専門家などの協力と参加のもとに、地域の文化的な宝を総合的な調査によって把握するとともに、関連文化財群や歴史文化保存活用区域といった新たな視点を取り入れながら、津和野町の文化財の保存・活用を方向づける基本構想等を策定するものである。

さらに、歴史文化基本構想は、地域の文化財をその周辺環境も含め、総合的に保存・活用していくための基本構想であり、実際に文化財の保存・活用を行っていくためには、より詳細な計画が必要となる。その計画が保存活用計画であり、関連文化財群や歴史文化保存活用区域における取組、それらの中から先導的な取組を取り上げ、連携させたプロジェクト、具体化のプログラムや推進体制などを明らかにする。つまり、「保存活用計画」は、「歴史文化基本構想」を具体化していくため、事業等の内容や手法、実施時期等を明らかにし、道筋をつけていく役割を担うものである。

なお、この事業の選定基準は、「国の指針を作成するにあたってモデルとなることが期待されること、策定にあたっては文化財担当部局とその他関連する担当部局の連携が綿密に行われること、様々な方法で地域住民の参加が期待されること」などであり、これらを踏まえて事業を推進した。

第２節　歴史文化基本構想等の位置づけ

津和野町歴史文化基本構想は、津和野町の文化財保護行政の最上位の計画として位置づける。

なお、行政全体における最上位計画である第１次津和野町総合振興計画を踏まえるとともに、関連する津和野町景観計画や各種文化財の保存管理計画等、及びその他関連計画や法制度と整合・連携させながら策定し、実効性のある計画を目指す。

＜目標年次について＞

「歴史文化基本構想」は、「地域の文化財をその周辺環境も含め総合的に保存・活用していくための基本構想」であり、長期的な観点に立って、文化財の保存・活用のあるべき姿、期待する姿なども含んでいる。

このため、構想の目標年次や計画期間は示さず、その点については、事業の具体化に力点を置いた「保存活用計画」で設定する。

「保存活用計画」は、前述のように事業実施の道筋をつけるものであり、目標となる時期を掲げておく必要がある。

本計画では、概ね10年先を目標年次とし、計画期間を以下のように設定する。

計画期間：平成23年度～平成32年度（2011年度～2020年度）

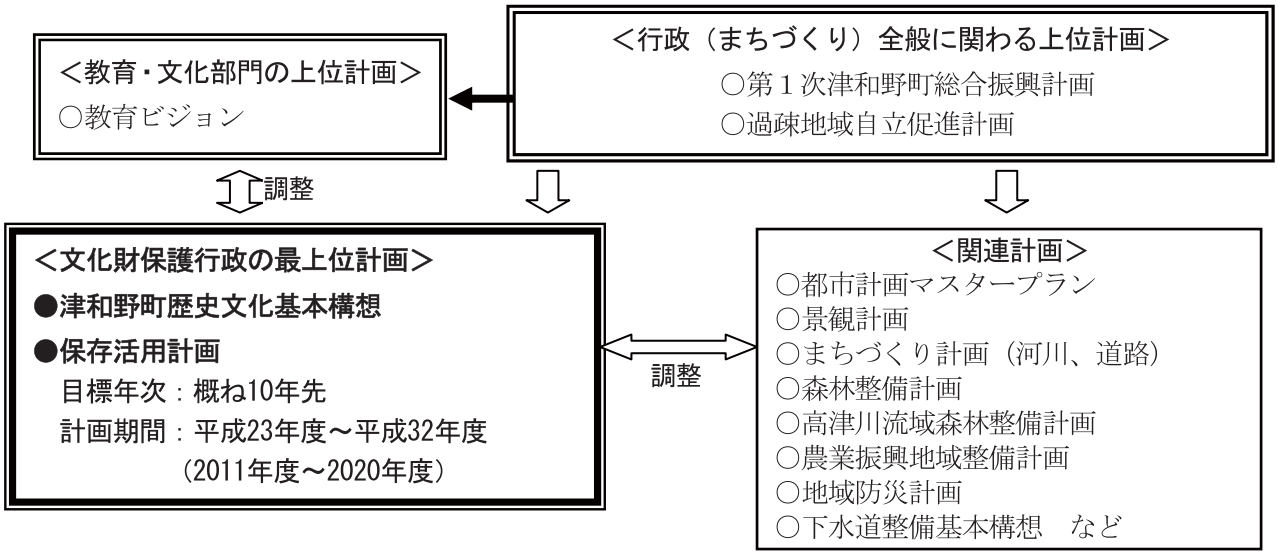


図0-1-1　津和野町歴史文化基本構想等と上位計画・関連計画

文化財とは（「文化審議会文化財分科会企画調査会・報告書　平成19年10月30日）

指定などの措置がとられているか否かにかかわらず、歴史上または芸術上など価値が高い、あるいは人々の生活の理解のために必要な**すべての文化的所産**を指す。※文字の強調とアンダーラインは、本報告書で行う。

↓

本事業における文化財も、上記の定義を踏まえ、指定・未指定を問わず、また、文化財保護法第２条の６種類の文化財財以外（引き継がれてきた暮らしや自然の音・におい、地割・町割、方言など）を含め、**「すべての文化的所産」を対象**とする。

※1　歴史文化基本構想

文化財を中核として，地域全体を歴史・文化の観点からとらえ、各種施策を統合して歴史文化を生かした地域づくりを行っていくための構想。

※2　歴史文化保存活用計画

「歴史文化基本構想」に基づき、「関連文化財群」又は「歴史文化保存活用区域」について、総合的に保存・活用を行っていくための計画。

※3　文化財総合的把握モデル事業

「歴史文化基本構想」の策定の指針を作成するための国（文化庁）の委託事業。複数の地方公共団体において、モデルケースとして基本構想の策定を行い、その方向性や課題を明らかにする。

第３節　モデル事業の推進体制と手順

本モデル事業を進めるにあたっては、津和野町歴史文化基本構想策定委員会と津和野町歴史文化基本構想運営委員会を設置した。

前者は構想の策定に、後者はそのための文化財調査と意見集約、委員会のための基礎的検討に重点を置くこととした。

また、事務局は津和野町教育委員会が担い、両委員会の運営や文化財調査の実施、及び計画（構想）の策定など、事業主体として業務を行った。

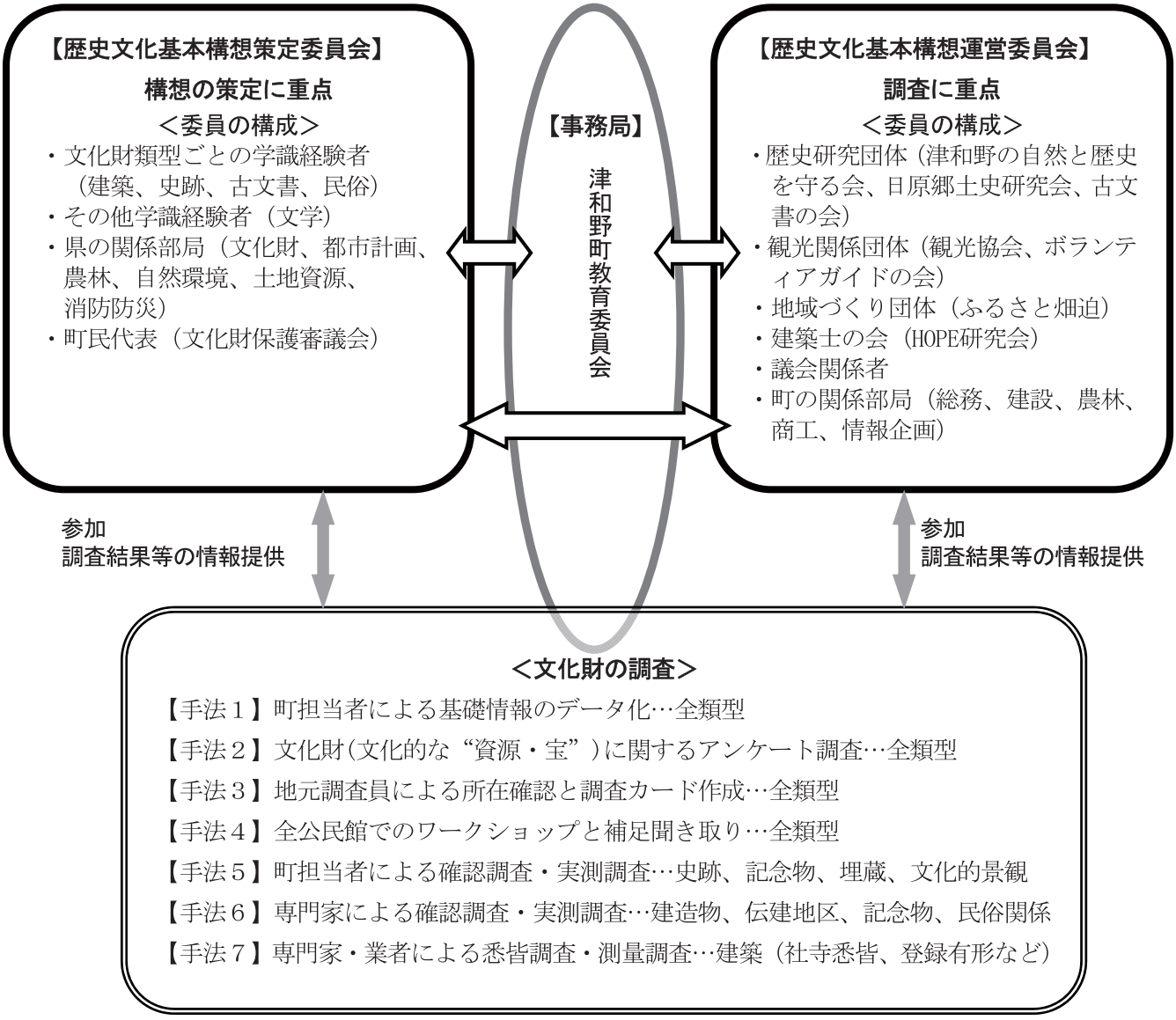
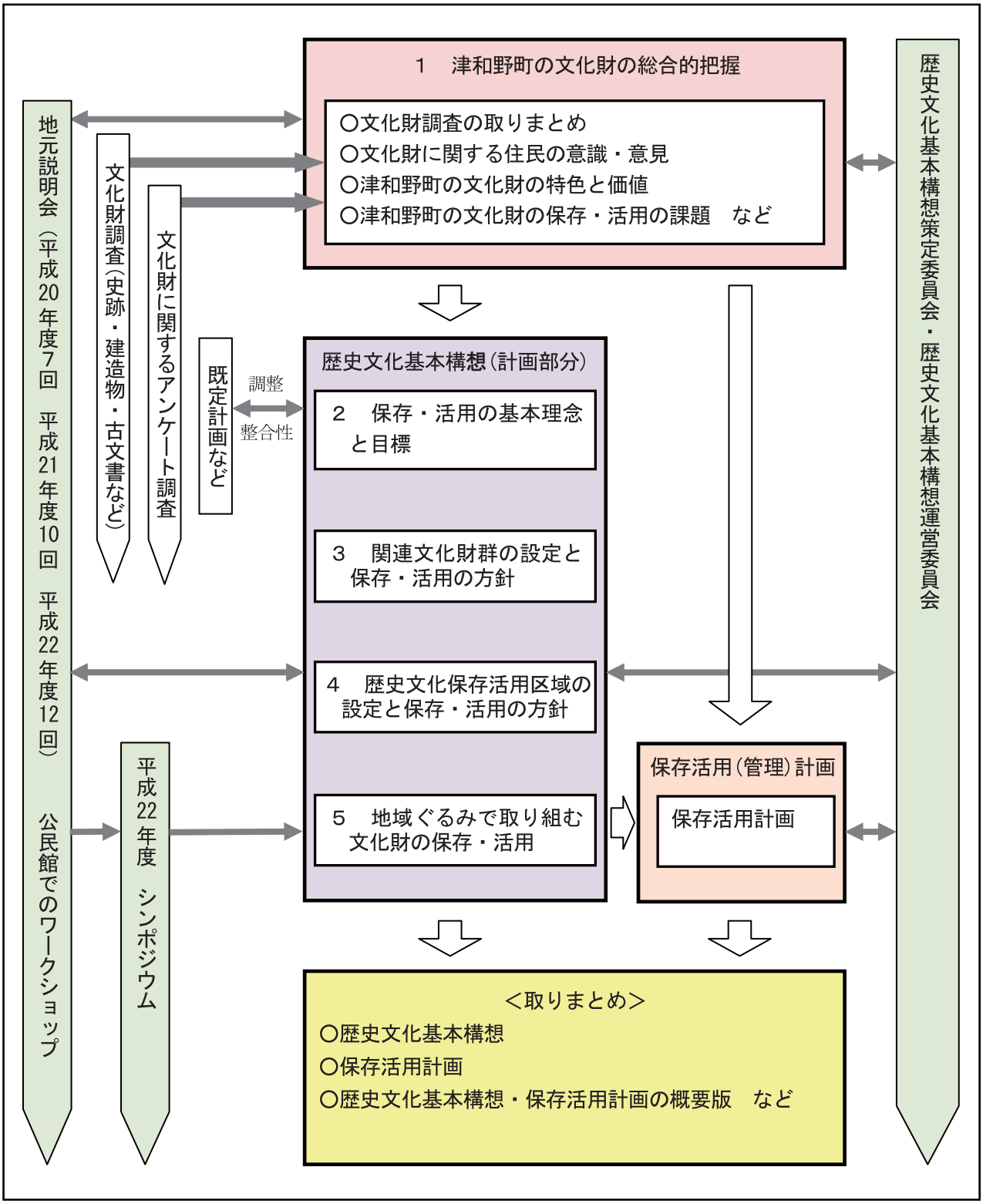


図0-1-2　事業推進体制～調査及び計画（構想）策定体制～



※平成22年度の地元説明会は、ワークショップ（９回）を含む。

図0-1-3　調査及び計画（構想）策定の手順

●運営委員会

委員長	百合本　修　司（ＨＯＰＥ研究会）
副委員長	岡　田　忠　良（津和野の自然と歴史を守る会）
委　員	山　本　幸　正（古文書の会）
	河　良　権　二（日原郷土史研究会）　Ｈ２０年度
	斎　藤　利　一（日原郷土史研究会）　Ｈ２１・２２年度
	青　木　登志男（ふるさと畑迫）
	高　野　　淳（津和野町観光協会）
	村　田　　進（津和野ボランティアガイドの会）
	下　森　博　之（文教民生常任委員会委員長・登録有形文化財所有者）Ｈ２０年度
	板　垣　敬　司（文教民生常任委員会委員長）Ｈ２１年度
	青　木　克　弥（文教民生常任委員会委員長）Ｈ２２年度
	大　庭　郁　夫（農林課長・営業課長）
	山　岡　浩　二（商工観光課長）
	伊　藤　博　文（建設課長）
	右　田　基　司（総務財政課長）Ｈ２０・２１年度
	島　田　賢　司（総務財政課長）Ｈ２２年度
	長　嶺　清　見（情報企画課長・地域振興課長）
	村　田　祐　一（まちづくり政策課長）Ｈ２２年度
	田　村　津与志（農林課長）Ｈ２２年度

●策定委員会

委員長	中　島　　巖（町長）Ｈ２０・Ｈ２１年１０月まで
	下　森　博　之（町長）Ｈ２１年１１月から
副委員長	長谷川　　堯（武蔵野美術大学名誉教授）
委　員	北　垣　聰一郎（石川県金沢城調査研究所所長）
	山　崎　一　穎（跡見学園女子大学教授）
	湯　川　洋　司（山口大学人文学部教授）
	小　林　准　士（島根大学法文学部准教授）
	矢ヶ崎　善太郎（京都工芸繊維大学准教授）
	松　島　　弘（文化財保護審議会会長）
	卜　部　吉　博（島根県教育庁文化財課長）Ｈ２０・２１年度
	松　本　岩　雄（島根県教育庁文化財課長）Ｈ２２年度
	林　　秀　樹（島根県土木部都市計画課長）Ｈ２０・２１年度
	黒　田　耕　一（島根県土木部都市計画課長）Ｈ２２年度
	松　本　公　一（島根県西部農林振興センター長）Ｈ２０年度
	安　松　　智（島根県西部農林振興センター長）Ｈ２１・２２年度
	井　塚　俊　一（島根県環境生活部自然環境課長）Ｈ２０年度
	藤　原　達　郎（島根県環境生活部自然環境課長）Ｈ２１年度
	板　倉　宏　文（島根県環境生活部自然環境課長）Ｈ２２年度
	原　　哲　夫（島根県地域振興部土地資源対策課長）Ｈ２０年度
	高　島　芳　郎（島根県地域振興部土地資源対策課長）Ｈ２１・２２年度

	藤　原　　弘	（島根県総務部消防防災課長）Ｈ２０年度
	井　塚　嗣　夫	（島根県総務部消防防災課長）Ｈ２１・２２年度

（事務局）

教育長	斎　藤　数　弘	Ｈ２０年１１月まで
	斎　藤　　誠	Ｈ２０年１２月から
教育次長	広　石　　修	Ｈ２０・２１年度
	世　良　清　美	Ｈ２２年度
次長補佐	斎　藤　道　夫	Ｈ２１・２２年度
文化財係長	中　井　将　胤	
文化振興係長	米　本　　潔	
文化財係	宮　田　健　一	
嘱　託	椋　木　牧　子	
臨時職員	漆　谷　保　子	
	斎　藤　勇　一	
	山　岡　洋　輔	
	中　島　和　希	
	竹　岡　幸　恵	
地域計画工房	山　下　和　也	
	増　村　嘉　大	

第２章　津和野町の概況と文化財の状況

第１節　津和野町の概況

１　位置・交通

津和野町は、島根県の最西端に位置し、町域の北及び東側は益田市、南側は吉賀町、北西及び南西側は山口県の萩市及び山口市に接している。

主要都市との位置関係を距離(道路)でみると、島根県の県庁所在地・松江市からは約190km、広島市からは約130km、山口市からは約60kmの距離にある。

広域的な交通条件をみると、国道９号及び187号、主要地方道津和野田万川線、主要地方道萩津和野線などが走っている。

また、ＪＲ山口線が通り、北から東青原、青原、日原、青野山、津和野の各駅がある。

さらに、南の吉賀町にある中国自動車道・六日市ＩＣが約30km、北の益田市にある石見空港（萩・石見空港）が約25kmの距離にある。



図0-2-1　津和野町の位置と交通条件

2　津和野町の自然

（1）　地形

津和野町は、中国山地の北面に位置し、山地部を中心とした中で、高津川※やその支流に沿って数多くの小規模な平地が形づくられ、典型的な中山間地域となっている。

町域の南東側には、島根県（県境以外）で一番標高の高い安蔵寺山（1,263m）をはじめ、燕岳（1,079m）、香仙原（1,056m）といった千メートル級の山々が連なり、一部高津川などでとぎれるものの、そこから緩やかに下る形で、町域を囲んで稜線が連なる。また、独立峰である青野山（908m）が特徴的な姿で町域の南側に位置し、ランドマークにもなっている。

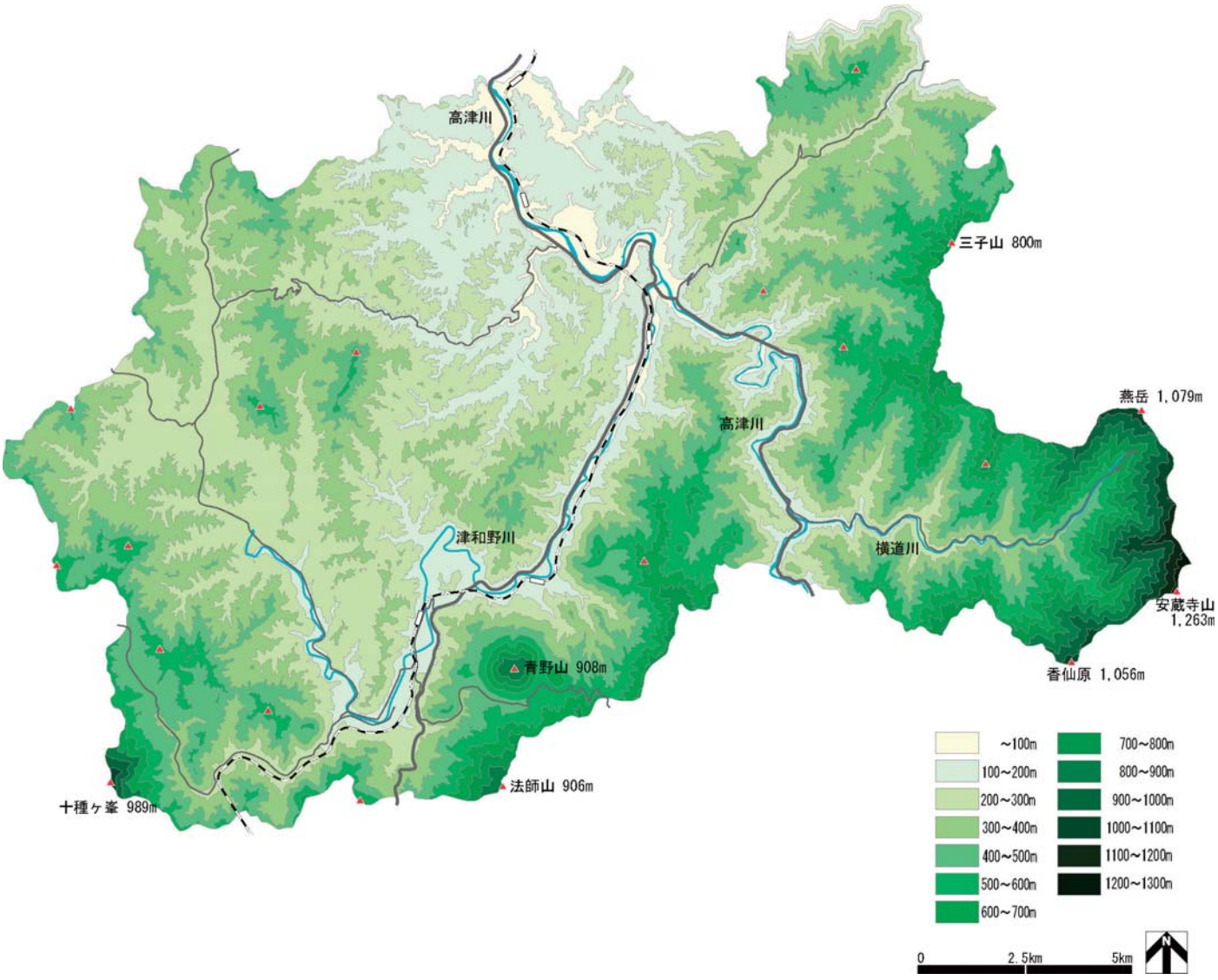


図0-2-2　津和野町の地形条件

※　高津川

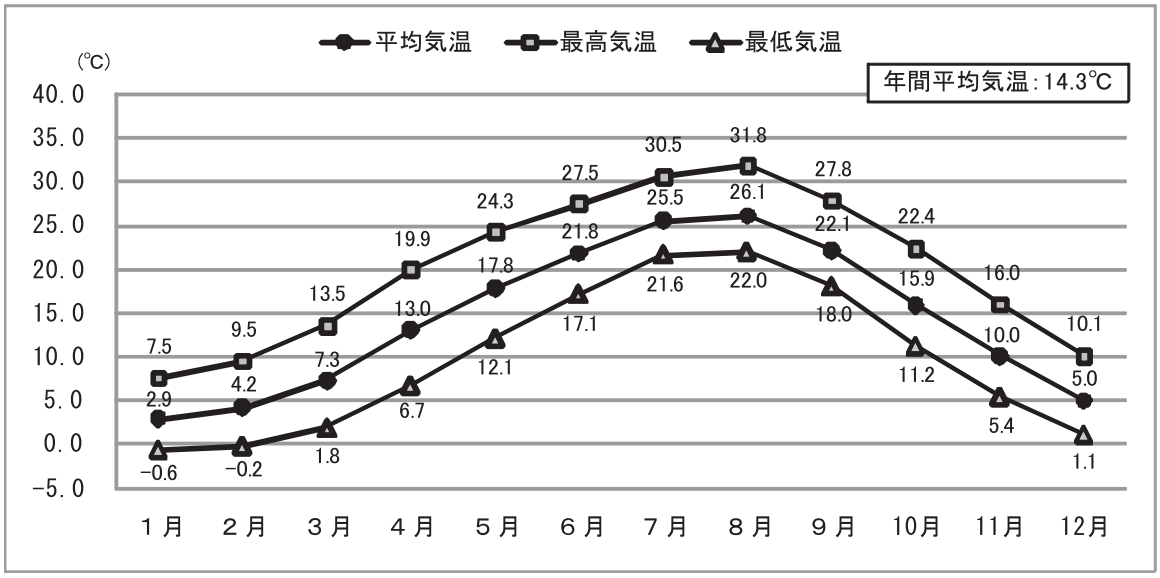
島根県西部を流れる一級河川高津川水系の河川で、延長約 81 ㎞。一級河川で唯一、支流を含めてダムが一切ない。日本有数の水質を誇り、平成 18(2006)年、平成 19(2007)年と２年続けて、一級河川の水質日本一（国土交通省）となる。

（２） 気候

津和野町の気候は、日本海沿岸と中国山地の内陸部の両方の特性を備えている。

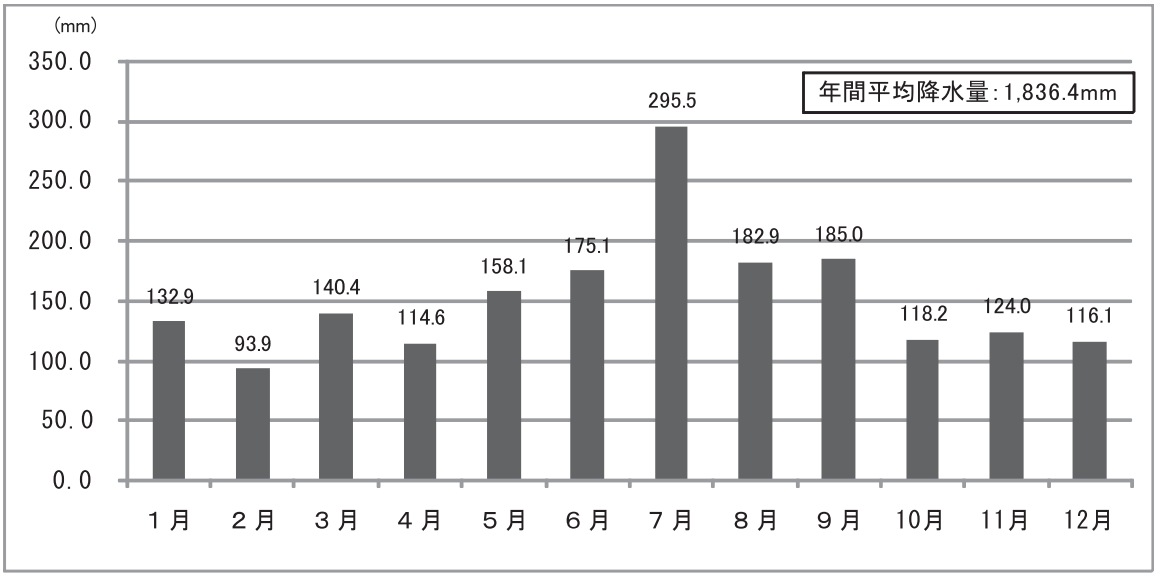
年間平均降水量は約1,836㎜（最近10年間の平均）となり、瀬戸内や太平洋側と比べて多く、冬期には降雪もある。

気温は、沿岸部と中国山地の稜線（県境）付近などとの中間的な値になっており、年間平均気温は14.3℃（最近10年間の平均）となっている。



資料：気象庁ホームページ（津和野）

※10年間（平成12年～平成21年）の平均値



資料：気象庁ホームページ（津和野）

※10年間（平成12年～平成21年）の平均値

図0-2-3　津和野町の気候

３　津和野町の歴史

＜古代＞

津和野は、かつて山蕗（つわぶ）きの生い茂る野であった。地名のゆわれである。

人類は縄文早期8000年前から当地に住みついた。

646年、大化の改新の国郡里（郷）制では、津和野地方（旧津和野町、旧日原町　現津和野町）は、石見国、鹿足郡「能野郷（ののごう）」とよばれていた。

＜中世＞

（１）　吉見時代（1282-1600 14代319年）

この津和野の地方は、すでに地頭代をつとめる左兵衛尉時次がいたが、本格的に開けたのは、元（げん）の再々来襲が予測され、山陰沿岸防備のため関東武士の吉見頼行が、能登より当地に下り木曽野に館をかまえた弘安５年（1282）以降である。

吉見氏は永仁３年（1295）、津和野霊亀山（367m）に一本松城（のち三本松城）を築城し町を開いた。とくに吉見氏11代、吉見正頼は、中国地方の大名の雄、大内義隆の姉、大宮姫を正室に迎えた。義隆は第一家老陶晴賢の陰謀により自死し、義兄の吉見正頼は、陶氏に三本松城を攻められた。天文の役である。正頼は城山の全山88カ所に掘られた縦堀、横堀の空壕と名将の指揮により、104日間の篭城に耐え講和した。

重要無形文化財に指定されている夏の津和野の風物詩である弥栄神社の疫病除けの神事「鷺舞」は、正頼の時代より始まったとされている。

慶長５年（1600）、西軍の雄、毛利氏の重臣であった吉見氏は、関が原の役に敗れ毛利氏を頼り萩へ退転した。14代、319年間の吉見氏の治世であった。その後、領地は一時幕府の直轄地として大森銀山奉行の支配を受ける。直接、津和野城および城下を預かったのは、吉見氏の遺臣で土着した堀平吉であった。幕府は、これより後も現津和野町のうち日原（にちはら）、中小屋（なかごや）、石ヶ谷、十王堂、畑迫（はたがさこ）の領地を五カ所村（間歩口（まぶくち）村）として、幕府の直轄地として大森銀山領の代官の支配下においた。幕府は、銅山師、堀藤十郎を五カ所取締役とした。旧堀氏庭園は、平成17年国の名勝に指定され、平成22年度に修復を終わる庭園の白壁に映る紅葉を観るため全国から観光客が訪れる。

＜近世＞

（２）　坂崎時代（1601-1618　１代16年）

慶長６年（1601）10月頃、坂崎出羽守成正（直盛）が備前富山城主から、三万石の津和野城（三本松城）城主として入城した。坂崎氏は、城の出丸、織部丸を石垣で築いた。城の土塁は石垣にかえ鉄砲戦に備え、城の強化をはかった。町の整備にも力を尽し、大火の多い町に防火用水のための側溝を町中に掘りめぐらした。蚊の幼虫ボウフラの発生を防ぐため溝に鯉を放った。今日津和野町が「鯉の町」といわれるゆえんである。

坂崎成正は元和元年（1615）、大坂夏の陣で、城を落ちのびる途中の豊臣秀頼の正室、千姫を家康の陣まで護送した。千姫再嫁の仲介を家康より頼まれるが、千姫は拒否、間もなく本多忠利へ再嫁が決まり、面目をつぶされた成正は千姫の輿を奪わんとして、江戸の屋敷に籠るが、幕府大目付で親友の柳生宗矩の諫めにより自死した。坂崎の治政はわずか16年間であったが、名主、澄川与助を抜擢し、豊後より楮（こうぞ）苗五万本を購入し移植させた。苗の活着の成果は直に成就をみなかったが、次の代の津和野藩の経済を支える基礎をつくった功労者である。

また、坂崎成正は、津和野藩へお預けとなっていた元横手城主（出羽国仙石）の小野寺遠江守義道に養女を与えるなど、企画家であると共に温情の人でもあった。町では50年毎に墓のある曹洞宗永明寺（ようめいじ）で

法会を営んでいる。近くは平成17年に行われた。

（３） 亀井時代(1617-1871 11代255年)

この後、元和３年(1617)新たに因州(鳥取県、鹿野町)鹿野城主、亀井氏２代、政矩(まさのり)が津和野町四万三千石の城主として入城した。初代新十郎は、鹿野に没したが、山陰を拠点に、九州の諸大名に互して、東南アジアとの朱印船貿易に活躍した。領内の河川治水など、土木工事、鉱山開発でも名をのこしている。津和野藩の行財政の確立は、津和野亀井氏初代 政矩（治政３年）、２代 茲政(これまさ)(同64年)、３代茲親(これちか)の代のはじめまでに一応の完成をみた。三代にわたる藩主を執政として補佐したのが、家老、多胡真清、次男 主水真益(もんどさねます)、三男 主水真武(さねたけ)、四男 外記真蔭(げきさねかげ)である。当職となった真益は領民総動員の開墾事業で、青野山麓の急斜地を開墾、耕して天に至る情景は「主水畠」と呼ばれた。他に沼原(ぬんばら)の７町３反の干拓事業、高津蟠竜湖の20町歩の干拓を完成させた。

石見半紙の生産で十五万石の収益

農民の借銀、借米を帳消しにし製紙業に力を入れ、坂崎氏が試みた楮苗の植え付けを定着させた。万治元年(1658)、大坂売払高は半紙六千十八丸に上り、奉書紙、杉原紙など公用紙に用いられる高級紙などは、その品質の上質さから、「石州半紙(せきしゅうばんし)(石見半紙)」として、大坂市場で評価を高めた。真益の殖産興業の実績は広く全国的に知られ、江戸中期の儒者で現実に即した経世論を説いた太宰春台は「津和野侯ノ大夫ガ多胡子半紙ヲ造リ、国ヲ富シタルガ如キ、地力ヲ尽セリト云フベキモノナリ」(経済録)「石州ノ津和野侯ハ四万石ノ禄ナルガ板紙ヲ造出シテ、是ヲ占テ売ル故ニ、十五万石ノ禄ニ比ス」(経済録拾遺)として、その政策を激賞している。

主水真武の代、藩の蓄財は余剰金銀二千四百四十七貫、米五千三百五十八石となった。儒学者、荻生徂徠は、その著「政談」において「亀井隠岐守(茲親)ガ家老(真武)ノ料簡ニテ石見ニ木ノ曲リ多キヲ考ヘ、鞍打(鞍作の職人)ヲ招ヨセ、鞍ヲ打セ、夫ヨリ津和野ヨリ鞍出来ル。隠岐守諸方ヘ音信ニモ之ヲ用フ」と述べ、真武が一木一草もおろそかにせず殖産工業に力を尽していることを讃えている。

藩財政の余剰金は幕府の知るところとなったのか、禁裏(御所)の造営や、中野の犬小屋の普請手代、勅使などの接待役、実に９回、門番、火防役の公役も含め、津和野藩は出費を強いられた。その費用の主なものは、以下のとおりである。

一、 江戸中野村の犬小屋の建築費用42,400両

一、 禁裏造営手代費用　35,840両2分

元禄11年(1698)、亀井茲親は伝奏役の勤めのおり、高家吉良上野介より、侮蔑的な扱いを受け、吉良を打つと激怒した。この間の事情を察した家老、真蔭は一両日待ってほしいと主君に告げ、絹織物や異国の陶磁器、菓子(源氏巻ともいう)に五百両の黄金金貨を添え吉良邸にいき、「藩主は田舎育ちで作法もよく存ぜぬため、よろしくお引き回しいただきたい」と土産物を差し出した。翌日より上野介の態度は一変し、事なきを得た。江戸時代の儒者 江木 戩も家老 真蔭に智があると讃えた。

藩校「養老館」創設

８代、亀井矩賢(のりかた)の代、藩校創設が決せられ、天明５年(1785)大坂より学頭に山口剛斎が招聘された(名、景徳、号　剛斎)。朱子学者で闇斎学派に属したが、書、禅、神道、兵学にも通じた。山口剛斎の交友関係には性理学(哲学)に通じた久米訂斎、国学にも通じた寛政の三博士のひとり、柴野栗山、儒学、国学、神道に通じた服部南郭らがあり、その影響から、万学に通じた剛斎の視野の広い学風は形成され、その後の藩校の校風に少なからず影響を与えた。矩賢は藩校の校名を孟子の梁恵王上からとり「養老館」と命名し、校舎を翌、天明６年(1786)、津和野城下中島北端に建てた。

養老館で教える儒学は官学の朱子学が中心であった。数学教育にも特色があり、藩士の堀田仁助(にすけ)は

幕府天文方に属し、伊能忠敬に先じて北海道全道の基本地図を作成した。堀田仁助は、数学測量術を津和野の家塾で門下生に教授し、門下の木村俊左衛門は、藩校の数学、測量術の教授となり、桑本才次郎を育てた。才次郎は養老館数学科の教授となり自著の養老館出版「尖円豁通」（微積分）をテキストとして教授した。彼のこの著の付録にはパリ大学の懸賞問題と同じ問題が七年も早く掲載されていた。

権力の正統性を伝統的権威に求め、近代日本民族を結集

11代、亀井茲監は養老館の改革を行い、嘉永２年(1849)国学者、岡熊臣を国学教授に抜擢、国学科を養老館の中心教学とすると共に、藩校の学則も制定させた。学則「道は、天皇の天下を治め給う大道にして開闢（かいびゃく）以来地に堕ちず」として、法でも英雄でもなく神武以来の皇統に日本の国家権力の正統性をもたせた。欧米列強のアジア植民地化、半植民地化の波が日本に押し寄せているおりから、日本の民族の近代化と結束の理論を各階層の主張、対立を超えて国学と伝統的権威である神権的天皇制に求めた。同年、西洋医学科も設置、教科書は「西学入門」（吉木蘭斉教授著、養老館出版）、ベルリン大、フーヘランドの「内治全書」を用いるなど、医学を志す藩外の留学生も受け入れた。

11代藩主、名君と称された茲監（これみ）は欧米列強の日本進出の脅威を前に、民族の結集をもとめ、朝廷、幕府へ意見書を上申した。特に情報網を強化、３日にあけず全国各地から飛脚早馬によって１通５ｍにも及ぶ報告書を送らせた。幕長戦争(長州征討1864-1865)のおりには、内乱は避けるべしとして情報分析の結果、藩主の強いリーダーシップと国学者福羽美静らの外交交渉により、ついに一発の弾丸も撃たれることなく戦火が避けられた。

なお、「王政復古」の大号令は、養老館国学教授に復帰していた大国隆正の理論「神祇官本義」を隆正の門下生の玉松操によって草稿が書かれたものである。明治初年の政体、二官八省のうち神祇官副知事(次官)には藩主の亀井茲監、神祇官判事には国学者、福羽美静が、書記には加部巌夫が就任、神祇官の中枢を津和野藩が占めた。

＜近代＞

宗教行政の中枢に津和野藩

明治新政府は、津和野藩出身の前記の人々を中心に、神道国教化政策を推進した。徳川幕府に継いでキリシタンは禁令とした。キリスト教が孤児の収容や、施薬院の設置など信仰と共に民衆の心をつかむ一方、強力な軍事力により、植民地化をはかるなど、アヘン戦争の撤を踏むことを恐れた結果のキリシタン禁令という理由もあった。

明治元年から２年にかけ、長崎浦上のキリスト教徒は検挙され、名古屋以西の十万石以上の諸藩へお預けとなった。四万三千石の津和野藩は、例外的に、お預けになる藩の対象となった。高松、松山その他の各藩が100名以下のお預け人数であったのに対して、津和野藩は153名と最多の人数がお預けとなった。津和野藩主や津和野藩の国学者らが、神祇官の中枢をしめ、神道国教化推進的立場にあったからである。お預かり所の旧光琳寺跡には「乙女峠マリア聖堂」が建ち、国際的に著名な場所になっている。

明治天皇「即位式」は、新式制定を津和野藩主、亀井茲監や藩の国学者らが政府から任命され、その新式で挙行された。

斯界の先哲を輩出

養老館儒学科教官であった西周（あまね）は「永の暇」をもらい、やがてオランダへ留学、帰国後、国際法「万国公法」の翻訳や将軍徳川慶喜のブレーンとして、「議題草案」を書き、二院制の確立を答申した。維新後は沼津兵学校(徳川家兵学校)頭取(校長)となり、やがて新政府と徳川家の命により、兵部

省に出仕、軍人のモラルの確立や軍事制度、諸規則の制定に携る一方、哲学による万学の統一をといた「百一新論」「百学連環」などの著書や私塾での講義により西洋哲学を紹介すると共に、西周独自の近代的哲学体系の確立を試みた。西周は明六社にも属し機関紙「明六雑誌」に多くの論文を発表、日本人の精神の近代化を啓発した。日本近代哲学の祖とされる。

津和野藩の奨学制度である「貢進生制度」によって、大学南校(東大理学部)に進んだ養老館出身の小藤文次郎は、日本地質学の祖とされ、彼の地震説と「濃尾大地震」の断層写真は世界の教科書に紹介され、先の阪神淡路の大地震を記念して作られた兵庫県北淡町にある震災記念館には、今日でも小藤の写真と共に根尾谷断層写真や地震説がパネルに掲載紹介されている。同じく養老館に学んだ山辺(やまのべ)丈夫(たけお)は、西周の塾やイギリスに学び、日本近代化の要請を受け紡績業を一職工からたたきあげて学び取り、帰国後、大阪紡績を興し、のち社長となり、それまで輸入七割の織物製品を、逆に七割を輸出するまでに成長させた。わが国近代紡績業の父とよばれる。なお斯界の祖とか父とかの命名は当時の学界によって付けられたものである。

全国諸藩に先がけ版籍奉還

日本を強大な中央集権国家として、対外政策に当ることを目的に、全国諸藩に先がけて津和野藩は藩籍を奉還し、浜田県に合併、養老館も廃校となった。養老館出身者には、前記の他、北海道帝国大学総長、高岡熊雄、島根県出身者ではじめて島根県知事となった高岡直吉らがあった。

文豪森鷗外は、養老館最後の在校生で２年間養老館に通った。その２年間は学年一番の優等生として賞を得ている。森鷗外は、「ヰタ・セクスアリス」「サフラン」「なかじきり」「本家・分家」など、10歳までを過ごした津和野の情景や思い出を作品に多く書きのこしている。また、文学博士、軍医総監として大成したのみならず近代日本の文豪として名をのこした。その多忙の中、森鷗外は津和野奨学会理事長として後身の育成にも尽力した。

教育立町を宣言

廃藩後、望月幸雄津和野町長は教育立町を宣言、養老館跡に郡立高等女学校を創設、やがて県立へ移管した。森鷗外は、明治42年(1909)9月25日の日記に「鹿足郡立高等女学校の落成報じ来ぬ、十月二日は開校すという」と記し、連綿とつづく養老館教育への思いを記している。望月氏は、県立津和野中学校創設にも着手、旧藩主、養老館卒業生のみならず、津和野出身者、旧藩であった各町村、隣県の山口県まで、献金を求めて歩き、すべて寄付により校舎を新築、設備も整え、県へ寄付した。その結果、県立中学校として県議会の承認を得て、旧制県立津和野中学校が創設された。当時、県立中学校、県立女学校が同時に併立されていたのは、松江市、浜田市についで津和野町のみであった。町長の教育立町の精神は、その後、日本脳外科の父、中田瑞穂、耳鼻咽喉科の泰斗、岩本彦之丞らを輩出している。

七百年の教育的風土は「歴史の町」「鯉の町」として名をとどめているだけでなく、津和野を日本的な美しさと、風格のある街にしている。

(松島　弘)

第２節　津和野町の文化財の状況

１　指定文化財

津和野町の指定文化財は、平成22年12月末現在、国指定が６件、県指定が19件、町指定が25件となり、合計50件となる。

また、国の登録有形文化財が16件（51棟）、登録記念物（名勝）が１件ある。

表0-2-1　文化財の指定・登録の状況（平成22年12月末時点）

種　別	区　分	国指定	県指定	町指定	合　計
有形文化財	建造物	0	3	2	5
	美術工芸品	0	8	2	10
民俗文化財	重要無形民俗文化財	1	0	0	1
	無形民俗文化財	0	2	2	4
	有形民俗文化財	0	1	0	1
記念物	史跡	4	4	11	17
	名勝	1	0	0	1
	天然記念物	0	1	9	10
合　計		6	19	25	50

国登録有形文化財	16件（51棟）
国登録記念物（名勝）	1件

表0-2-2　津和野町の文化財：指定・登録（１／２）

種　別				名　称	所有者（管理者）	指定年月日
有形文化財	建造物		県	鷲原八幡宮社殿	鷲原八幡宮	S47.3.31
			〃	旧津和野藩家老多胡家表門（表門・番所・土塀）	個人	S40.4.1
			〃	三渡八幡宮本殿　附・棟梁之記（松材）１枚	三渡八幡宮	H7.10.27
			〃	永明寺　附・棟札２枚	永明寺	S4.2.18（町指定） H5.12.28(県指定)
			町	竹原家住宅	個人	H18.5.1
	美術工芸品	絵画	県	西周肖像（高橋由一筆）	津和野町	S47.3.31
			〃	絹本著色十六羅漢像図	永明寺	S49.12.27
		書籍	〃	紺地金字妙法蓮華経安楽行品	個人	S41.5.31
			〃	紙本墨書新勅撰和歌集	津和野町	H5.5.11
		古文書	〃	天球儀・地球儀	稲成神社	S49.12.27
			〃	紙本著色日本国地理測量之図	稲成神社	S60.4.23
			〃	紙本著色東三拾三国沿岸測量之図	稲成神社	S60.4.23
			〃	石見国絵図	津和野町	S56.4.23
		工芸品	県	太刀銘直綱附糸巻太刀拵	津和野町	H10.3.27
		歴史資料	町	鷲原八幡宮社殿奉納掲額	鷲原八幡宮	S52.12.17
民俗文化財	重要無形民俗文化財		国	弥栄神社の鷺舞	弥栄神社の鷺舞保存会	H6.12.13
	無形民俗文化財		県	津和野踊	津和野踊りの保持者会	S37.6.12
			〃	柳神楽	柳神楽保存会	S43.6.7
			町	奴行列	奴行列保存会	S54.9.15
			〃	鷲原八幡宮の流鏑馬神事	津和野流鏑馬保存会	H8.4.1
	有形民俗文化財		県	柳神楽の面と衣装	柳神楽保存会	S42.5.24
記念物	史跡		国	津和野城跡	津和野町他	S17.10.14 S47.5.26 H19.7.26
			〃	森鷗外旧宅（1棟）	津和野町	S44.10.29
			〃	西周旧居（2棟）	個人	S62.7.20
			〃	山陰道　（蒲生峠越）徳城峠越・野坂峠越	津和野町他	H21.2.12
			県	鷲原八幡宮流鏑馬馬場	財務省	S41.5.31
			〃	津和野藩校養老館（2棟）	津和野町	S44.2.18
			町	木蘭遺跡	個人	S54.9.15
			〃	岡熊臣旧宅（１棟）	津和野町	H8.12.10
			〃	下瀬山城跡	三渡曽庭自治会他	S41.8.1
			〃	宗梧監守禅師の墓	個人	S41.8.1
			〃	（伝）下瀬加賀守の墓	個人	S41.8.1
			〃	社地脇古墳	個人	S60.9.5
			〃	天正十三年在銘宝篋印塔	個人	S60.9.5
			〃	瀧谷たたら跡	個人	S60.9.5
			〃	枕瀬代官所跡	個人	S60.9.5
			〃	青原代官所跡	個人	S60.9.5

表0-2-2　津和野町の文化財：指定・登録（２／２）

種　別			名　称	所有者 （管理者）	指定年月日
記念物	名勝	国	旧堀氏庭園	津和野町他	H17.7.14
	天然記念物	県	大元神社の樟	大元神社	S33.7.1
		町	愛宕神社の大銀杏	愛宕神杜	S48.10.23
		〃	愛宕神社の無患子	愛宕神社	S48.10.23
		〃	弥栄神社の大欅	弥栄神社	S48.10.23
		〃	鷲原八幡宮の大杉	鷲原八幡宮	S48.10.23
		〃	若宮神社跡たぶの木	門林自治会	S56.4.28
		〃	三渡八幡宮社叢	三渡八幡宮	S50.9.5
		〃	青原八幡宮社叢	青原八幡宮	S50.9.5
		〃	左鐙八幡宮社叢	左鐙八幡宮	S50.9.5
		〃	安蔵寺山の大ミズナラ	林野庁	H11.11.26
登録 有形文化財		国	津和野カトリック教会（２件）	カトリック広島 司教区	H8.12.26 H22.7.16
		〃	津和野町役場	津和野町	H8.12.26
		〃	津和野郷土館	津和野町	H20.7.8
		〃	下森酒造場（７件）	個人	H20.7.8
		〃	藤井家住宅（２件）	個人	H20.7.8
		〃	財間家住宅（７件）	個人	H22.7.16
		〃	分銅屋（４件）	個人	H22.7.16
		〃	旧布施時計店店舗兼主屋	個人	H22.7.16
		〃	古橋酒造場（５件）	民間企業	H22.7.16
		〃	橋本酒造場（３件）	民間企業	H22.7.16
		〃	華泉酒造場（５件）	個人	H22.7.16
		〃	河田商店（５件）	個人	H22.7.16
		〃	依種苗店店舗兼主屋	個人	H22.7.16
		〃	ささや呉服店（４件）	民間企業	H22.7.16
		〃	河田家住宅主屋	個人	H22.7.16
		〃	杜塾美術館（２件）	民間企業	H22.7.16
登録記念物		国	亀井氏庭園	（財）亀井温故館	H20.7.28

2　文化財の総合的把握調査の方針

文化財の総合的把握において、まず津和野町史や日原町史などすでに調査、研究が行われている資料をもとにすべての要素を拾い上げてリスト化した。現状を把握する方法としては地元調査員による調査結果のカード化や公民館などでの地域住民を対象としたヒアリングを実施した。また、町教育委員会や専門家などによる調査については主としてこれまで指定が行われていない分野について重点を置くとともに、今後の文化財保護の方向性を見据えたうえで、地域の新たな特性を見出すことのできるような調査を心掛けた。

文化財指定については、旧津和野町、旧日原町においてそれぞれ指定のあり方が異なっていたことから、指定内容もまちまちであったが、本事業の期間内においてその価値が明らかになった登録有形文化財については先行的に専門的な調査を実施し、登録を行っている。

また、津和野城下町史跡群のうち、県指定有形文化財の鷲原八幡宮（本殿、楼門）については社寺建築調査の結果、新たにその価値を再評価する必要があることが判明し、また未指定の藩主亀井家墓所についても石材や石造物などの総合的な調査の結果新たな価値づけかできたことから、それぞれ別途報告書としてまとめた。（「鷲原八幡宮総合調査事業報告書」、「津和野藩主亀井家墓所」　いずれも平成23年3月津和野町教育委員会発行。）

今後、他の要素についても総合的な調査の結果を踏まえ、国の示す指定基準に準じて文化財指定を目指すともに、基準を満たさないまでも、地域の歴史を守るために重要な文化財については、文化財保護審議会において町独自の基準を設け、保存・活用を図っていくこととしたい。

表0-2-3　文化財総合的把握調査集計

	調査リスト件数	調査済	達成率
橋北	276	208	76%
橋南	192	187	97%
木部	233	254	109%
畑迫	82	89	108%
小川	130	123	95%
日原	151	136	90%
青原	79	73	92%
左鐙	75	77	103%
須川	48	45	94%
合計	1266	1192	94%

*重複分等は一件として纏めています。

* 調査リスト＝町史等を参考に津和野町にある文化財をリストアップしたもの。

調査員の方から寄せられた調査カードは調査済として調査リストに追加しています。

*この数値は“津和野町文化財一覧”内のリストを基に集計を行っています。

3　文化財類型に基づく文化財調査

（1）　有形文化財

①　建造物

ア　津和野町社寺建築調査

これまで実施されていなかった町内社寺総合調査について、地元調査員が文化財として拾い上げた調書（一次調査）から、社寺建築が現存しているものを抽出し（109社寺、200棟）、町内社寺建築の悉皆リストの作成をした。その上で奈良文化財研究所の協力のもと、二次調査として現地調査を行い（57件、135棟）、簡単な調書作成と写真撮影をおこなった。さらに二次調査の成果にもとづいて、近世の特徴ある社寺建築13件を抽出し、三次調査として調査を行い当該建築の歴史的価値を明確にした。最後に四次調査として、中世末期に建築され、江戸期に整備された鷲原八幡宮について、詳細な調査を行い、その建築の履歴・特徴を明確にし、価値づけを明確にした。これらの調査結果については別途「鷲原八幡宮総合調査報告書～附町内社寺調査～」としてまとめている。

この他、明治の建築である旧堀氏庭園の楽山荘と橋本酒造場などは、往時の状況を良好にとどめ、非常に価値が高いが、詳細な調査は実施できなかった。

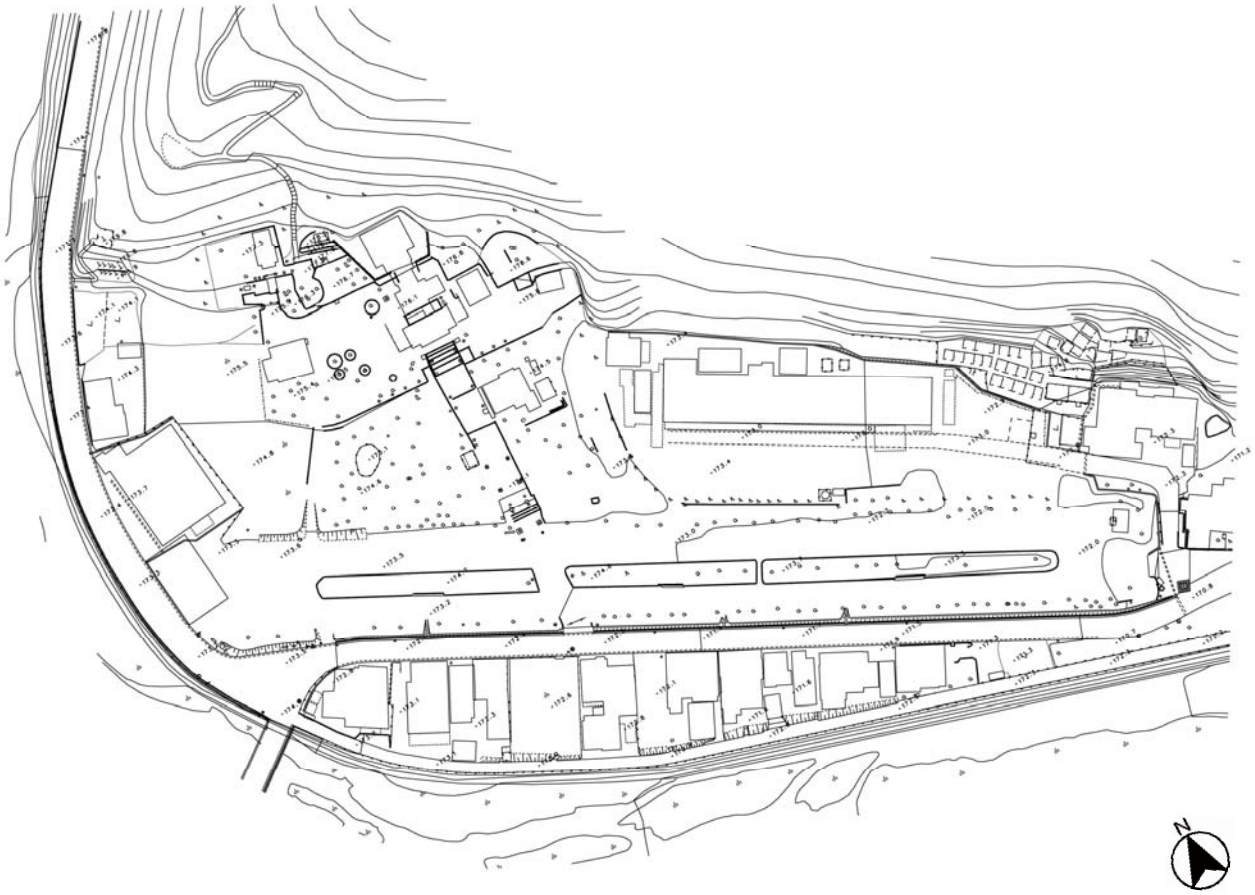


図0-2-4　鷲原八幡宮配置図

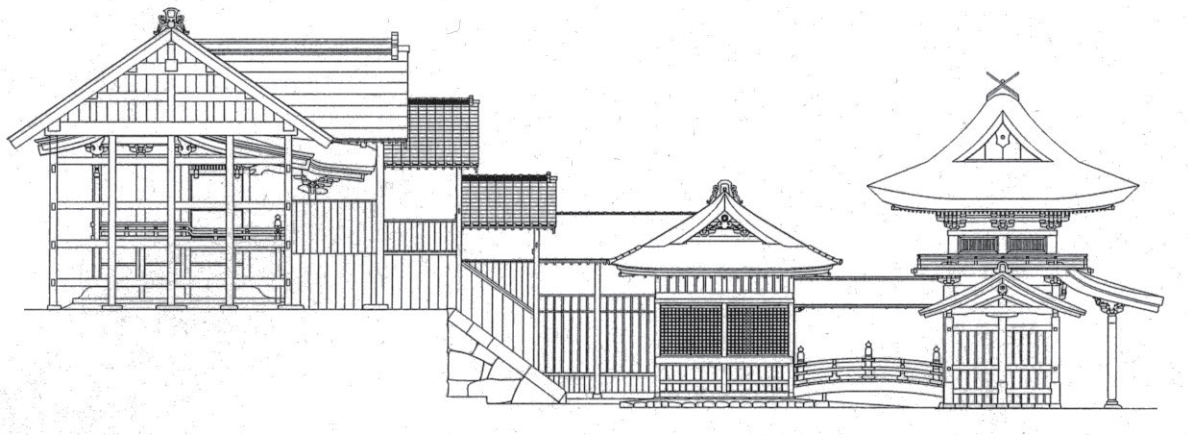


図0-2-5　鷲原八幡宮立面図



鷲原八幡宮楼門



鷲原八幡宮方形池・潔斎橋



鷲原八幡宮拝殿



鷲原八幡宮本殿

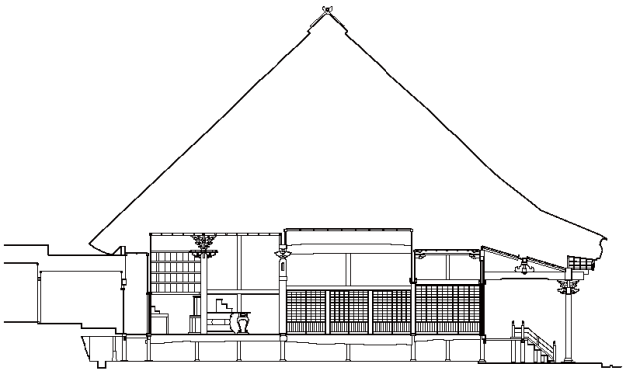


図0-2-6　永明寺断面図



永明寺本堂

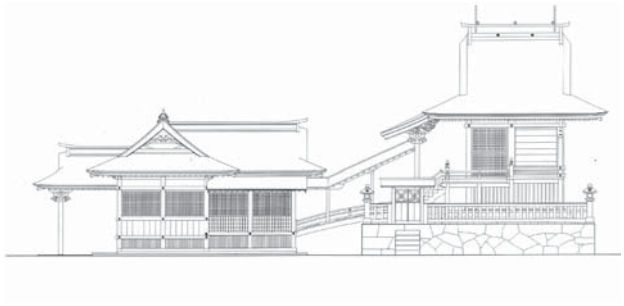


図0-2-7　弥栄神社立面図



弥栄神社



名勝旧堀氏庭園「楽山荘」



登録有形文化財橋本酒造場

イ　登録有形文化財群

旧城下町内の全家屋を対象に建築年代を調べ、建物の特徴などを調べた調査カードを作成、建築年代ごとに図面上で分類を行った。これらをもとに、まず文化財的な価値が高いと考えられる15件を選びだし、平成20年度において測量調査および図化、平成21年度で歴史資料および建物の詳細調査を行った。その後、文化庁主任調査官の現地調査を経て、平成22年９月に殿町通り、本町通りを中心として12件39棟の登録を行った（町全体では合計で51棟）。また、登録所有者による「津和野町登録有形文化財保持者の会」（会員15、賛助会員１）を設立、今後の保存・活用のための学習会等の開催、普及啓発活動などを行うこととなった。今後は全町を対象に登録候補別（鉄道遺産、土蔵群など）のリストづくりを行い、同様の調査および図化を計画的に行いたいと考えている。

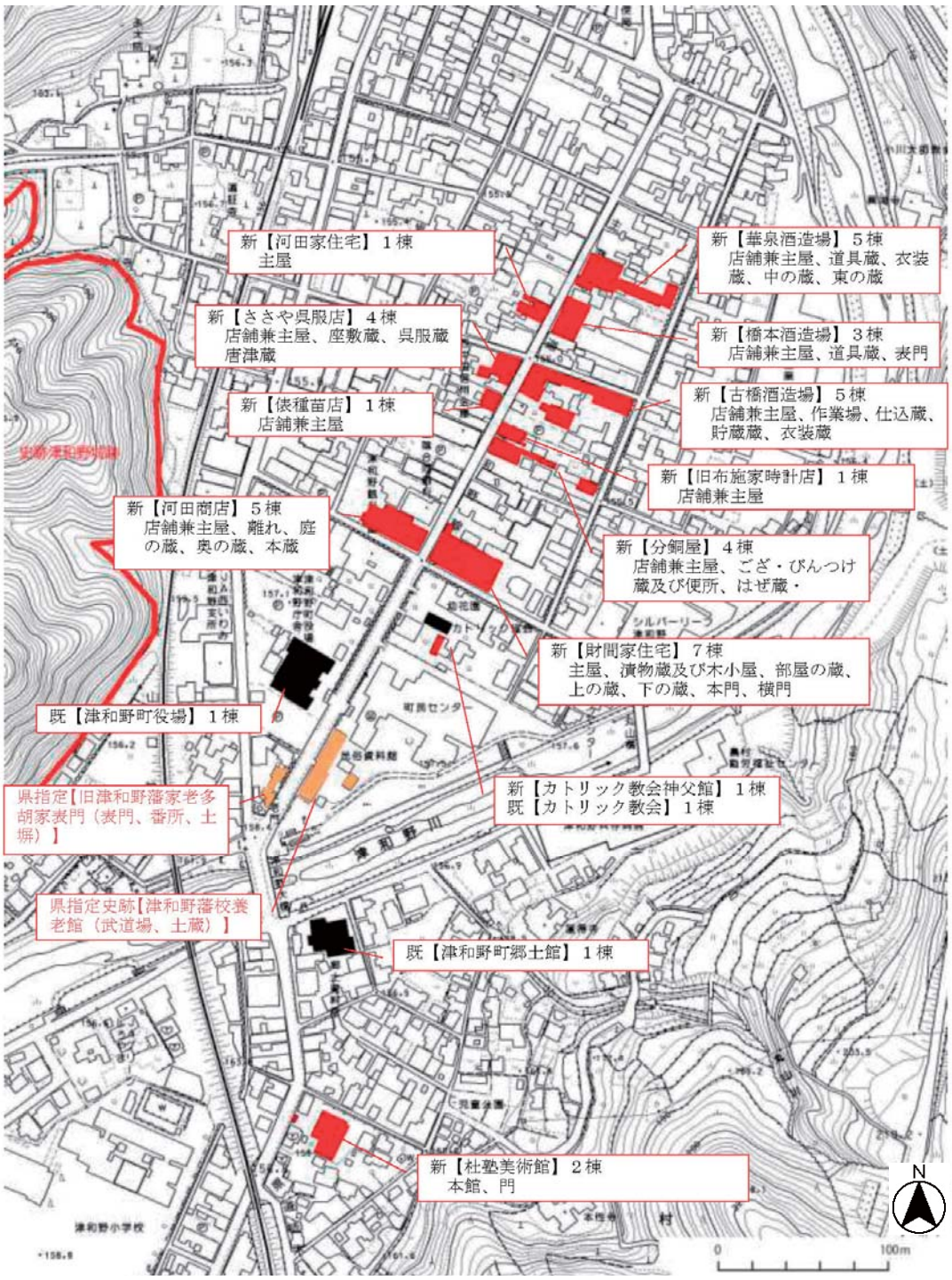


図0-2-8　新登録　登録有形文化財群の分布



財間家住宅



河田商店



俵種苗店



分銅屋

表0-2-4　登録有形文化財一覧（計51棟）

名　称	所有者（管理者）	指定年月日
津和野カトリック教会（２棟）	カトリック広島 司教区	H8.12.26 H22.7.16
津和野町役場	津和野町	H8.12.26
津和野郷土館	津和野町	H20.7.8
下森酒造場（７棟）	個人	H20.7.8
藤井家住宅（２棟）	個人	H20.7.8
財間家住宅（７棟）	個人	H22.7.16
分銅屋（４棟）	個人	H22.7.16
旧布施時計店店舗兼主屋	個人	H22.7.16
古橋酒造場（５棟）	民間企業	H22.7.16
橋本酒造場（３棟）	民間企業	H22.7.16
華泉酒造場（５棟）	個人	H22.7.16
河田商店（５棟）	個人	H22.7.16
依種苗店店舗兼主屋	個人	H22.7.16
ささや呉服店（４棟）	民間企業	H22.7.16
河田家住宅主屋	個人	H22.7.16
杜塾美術館（２棟）	民間企業	H22.7.16

②　美術工芸品

ア　津和野藩邸板戸絵

津和野藩邸にあった各部屋を仕切る板戸に津和野藩の絵師による絵が描かれていたが（栗本格斎画「津和野藩邸内之図」亀井温故館所蔵）、明治６年に藩邸が解体された際に、部材等が売り払われた。この板戸絵については、津和野町郷土館、津和野町民俗資料館、日原歴史民俗資料館などにわずか数点が保管されているが、町内の建造物調査に際に、古い商家などに数十枚残されていることが判明した。また、浜田市にも同様の板戸絵が残っていることも分かり、明治６年の津和野藩邸の浜田移設に伴い、建具なども一緒に移設されたことも判明した。今回は所在確認調査までしかできなかったが、さらなる追加調査および亀井温故館所蔵の「津和野藩邸内之図」とのマッチングなど今後専門的な調査を行い、保存のための対策が急がれる。

表0-2-5　津和野藩邸板戸絵所在確認リスト

No.	所蔵先	枚数	表	裏	備考
1	郷土館	2	人物	人物	半間
			人物	鼠	半間
2	津和野町民俗資料館	3	花	無	半間
			猫、花	馬	１間半
			松	無	半間
3	日原歴史民俗資料館	2	蛙	龍	１間2枚組
			人物	龍	
4	津和野中学校	1	馬、松	猫	１間
5	下森酒造場	6	人物	無	半間
			龍	無	半間
			松、寅	無	4枚組
6	沙羅の木	3	龍	松	半間
			花	花	半間
			松	不明	半間
7	津和野美術館	1	寅	人物	半間
8	分銅屋	1	人物	人物	不明（部分）
9	ささや	1	人物、鳥	竹	半間
10	海老舎	1	鶴	菊	半間
11	橋本酒造場	2	人物、梅	無	2枚組
			鶴、子供	無	
12	華泉酒造場	3	鹿	山羊	半間
			人物	人物	半間
			不明	不明	半間
13	高津屋	1	鷹	無	半間
14	明月	2	子供	無	半間　２枚組
			子供	無	
15	永明寺	14	獅子	龍	半間　4枚組
			鯉	鳥	半間　2枚組
			花、鳥	人物	半間　2枚組
			花、鳥	獅子	半間　2枚組
			花、鳥	花、鳥	半間　2枚組
			花、鳥	人物	半間　2枚組
16	浜田市	2	鳥	鳥	１間
			鯉	花	半間
17	江津市	1	鶴、松	不明	1.5間
18	暁音寺（益田市）	1	鶴	鶴	１間
19	須佐益田館（萩市）	5	狸	鷺	半間
			としゃく	竹と縄	半間
			としゃく	不明	半間
			鷹	不明	半間
			花	不明	半間
合計		52			



津和野郷土館所蔵



津和野民俗資料館所蔵



日原歴史民俗資料館所蔵



橋本酒造場所蔵



分銅屋所蔵



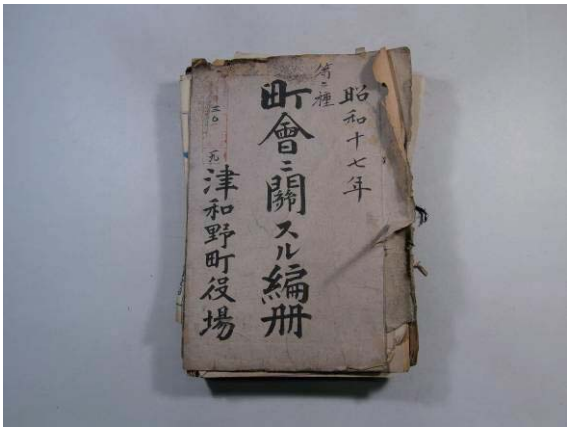
永明寺所蔵

イ　近代行政文書

行政文書が失われつつある中で、整理されることなく倉庫などに放置されていた文書についてこの機会に整理、調査を行った。

今回整理した文書は、役場庁舎内に残されている文書のうち旧津和野町における主として明治７年から昭和50年代の文書2,491点である。主として役場関係の資料で、中でも今は県にも保管されていない指令、訓令関係がもっとも多い。次に帳簿類、議会関係と続き、中には山口線開通に関する資料もある。地域別には津和野が約半数を占め、畑迫、小川がほぼ同数、木部が極端に少なくなっている。

今後の詳細な調査によって近代津和野の発展の過程を知る上で大変貴重な資料である。



津和野町役場　文書



畑迫村役場　文書



木部村役場　文書



文書調査風景

表0-2-6　近代行政文書リスト

	津和野				木部				畑迫				小川				備考
	件数	年代			件数	年代			件数	年代			件数	年代			
Ⅰ役場関係	525	明治7	～	昭和51	87	明治22	～	昭和30	131	明治17	～	昭和29	117	明治5	～	昭和36	
Ⅰ－ⅰ名簿	23	明治7	～	昭和37	5	明治44	～	昭和27	7	明治30	～	昭和27	5	明治22	～	昭和29	
Ⅰ－ⅱ指令	113	明治20	～	昭和35	7	明治22	～	昭和27	17	明治17	～	昭和27	22	明治5	～	昭和32	
Ⅰ－ⅲ各部署	39	明治40	～	昭和37	2	明治32	～	大正8	21	明治21	～	昭和29	16	明治17	～	昭和35	
Ⅰ－ⅳ日誌	63	明治13	～	昭和40	53	明治29	～	昭和27	61	明治21	～	昭和29	17	明治44	～	昭和12	
Ⅰ－ⅴ契約・届	12	明治17	～	昭和35	2	明治40	～	昭和4	4	明治39	～	明治42	9	明治17	～	昭和19	
Ⅰ－ⅵ雑欵	66	明治8	～	昭和30	6	昭和25	～	昭和29	10	明治39	～	明治44	9	明治22	～	昭和36	
Ⅰ－ⅶ統計	72	明治17	～	昭和40	5	昭和27	～	昭和29	7	明治41	～	昭和14	13	明治17	～	昭和19	
Ⅰ－ⅷ広報	64	明治21	～	昭和51	1	昭和29	～	昭和29	3	明治42	～	昭和25	14	明治22	～	昭和28	
Ⅰ－ⅸ貯蓄	11	昭和16	～	昭和37	0		～		0		～		0		～		
Ⅰ－ⅹその他	62	明治18	～	昭和48	6	明治31	～	昭和30	1	明治41	～	明治41	12	明治36	～	昭和29	
Ⅱ議会	200	明治21	～	昭和49	3	昭和26	～	昭和29	70	明治22	～	昭和29	111	明治17	～	昭和39	
Ⅲ帳簿	334	明治22	～	昭和41	8	大正15	～	昭和31	302	明治11	～	昭和29	280	明治19	～	昭和32	
Ⅳ基本財産	90	明治7	～	昭和48	6	明治45	～	昭和32	42	明治10	～	昭和27	45	明治7	～	昭和30	
Ⅴ社寺	3	大正11	～	昭和23	3	明治36	～	明治43	15	明治7	～	昭和15	4	明治14	～	昭和6	
Ⅵ学校	25	明治32	～	昭和35	3	昭和10	～	昭和26	7	明治25	～	明治42	9	明治35	～	大正4	
Ⅶ消防・警防	33	明治37	～	昭和37	16	昭和11	～	昭和28	2	昭和24	～	昭和24	2	大正12	～	昭和21	
Ⅷ交通	11	大正5	～	昭和32	0				2	明治14	～	明治14	2	明治18	～	明治18	
Ⅸ亀井	3	大正12	～	昭和4	0				0				0				
合計	1,224				126				571				570				2,491

ウ　堀氏文書

旧堀氏庭園に関する堀氏文書については、笹ヶ谷銅山をはじめとし、鉱山の歴史を知る上で貴重な史料である。以前からその重要性については認識されていたものの、資料については調査が行われてこなかった。現在、堀氏分目録として近代以前の資料について刊行されているが、このたびの事業で「鉱山総括資料目録」と「堀家什書目録」について整理した。

旧堀氏庭園整備検討委員会では、今後早期に調査委員会を立ち上げ、大学等の研究機関や石見銀山資料館と連携しながら目録の作成を計画的に実施することとした。

今年度において旧堀氏庭園の整備が終了することに合わせ、今後計画的に文書調査を行うべく、現在の所有者である大谷氏から津和野町へ古文書等の資料が寄託されることとなっている。

表0-2-7　堀氏什書目録一覧

大分類	年号	資料番号
１．證文	自　宝暦 11 年　至　安政 4 年	1～204
	年記未詳	205～226
２．記録		
①津和野之部	自　天明 2 年　至　安政 5 年	1～64
②浜田之部	自　明和 7 年　至　嘉永 7 年	1～20
③大森之部	自　明和元年　至　明治 4 年	1～23
④萩之部	自　文化 3 年　至　嘉永 6 年	1～27
⑤其他之部	自　天保 6 年　至　嘉永元年	1～4
⑥家記之部		1～80
３．日記		
①大森	自　文化 13 年　至　文久 2 年	1～61
①津和野	自　文化 13 年　至　文久 3 年	62～77
①萩	安政 4 年前後	78～80
４．村誌料	自　寛政 2 年　至　明治 5 年	1～32
５．袋入一件書類	自　文政 13 年　至　慶應 4 年	1～10
６．帳簿	自　享保 7 年　至　文政 7 年	1～171



堀氏文書の調査

表0-2-8　堀氏鉱山総括資料目録一覧（１／３）

番号	名称	数量
1	金穀貸附帖	計　74 冊
2	田畑春定取立帖	計　137 冊
3	金銭請拂日計簿	計　36 冊
4	金穀差引帖	計　48 冊
5	支拂金仕訳帖	計　22 冊
6	各町村地所台帖	計　25 冊
7	各町村土地台帖	計　28 冊と 1 括
8	米穀支出仕訳帖・米穀請払日計簿	計　21 冊
9	諸上納帖	計　18 冊
10	鉱山金請拂帖	計　10 冊
11	金請拂帖	計　52 冊
12	金取下帖	計　29 冊
13	収入金上帖	計　37 冊
14	収支金仕訳帖	計　24 冊
15	出納簿	計　10 冊
16	小作台帖	計　10 冊
17	収支金決算書	計　3 冊
18	経費決算仕訳書	計　6 冊
19	年々懸滞仕出帖	計　3 冊
20	明治 41 年　各月経費決算表	計　11 冊
21	収入金帖等	計　11 冊
22	仕訳帖	計　5 冊
23	本店現金出納予算・決算簿	計　4 冊
24	区分簿	計　2 冊
25	賞興金預り台帖	計　2 冊
26	西光寺関係書類	計　11 冊と８袋 or1 箱
27	諸経費	計　15 冊
28	作付米貸付帖	計　2 冊
29	金銭受拂帖（板垣氏）	計　3 冊
30	各月資産増減並収支計算表	計　1 冊
31	各月収支仕訳決算綴	計　1 冊
32	乙号収支金月別仕訳表	計　1 冊
33	昭和５年以降加調関係計算書	計　10 冊
34	検見帖	計 19 冊
35	田畑宅地春定台帖（板垣氏）	計　6 冊
36	名寄帖謄本	計　18 冊
37	伊予國温泉郡荏原村土地関係	計　6 点
38	寄附関係書類	計　2 点
39	貸金関係	計　3 冊
40	河野清助到来往復書状	計　6 綴
41	河野発送品報告書綴	計　3 綴
42	大阪買物河野拂出金明細書等	計　4 冊
43	主人留守中金受払帖	計　1 冊
44	各村役場納入金・領収証留	計　1 冊
45	役員預ヶ金勘定帖	計　1 冊
46	歳末及心附関係書	計　1 冊
47	土地異動に係る願届書（堀地所部）	計　2 冊
48	公債・株券台帖（堀氏）	計　1 冊
49	地賃取立帖（津堀）	計　2 冊
50	地賃・年貢関係	計　27 冊

表0-2-8　堀氏鉱山総括資料目録一覧（２／３）

番号	名称	数量
52	土地・家屋修繕関係	計　8冊
53	資産異動調・所有地統計	計　1冊
54	土地入費（地所部）	計　3冊
55	春骨井手出夫並勘定帖（地所部）	計　2冊
56	作付米貸附承印簿（堀氏）	計　1冊
57	金銭仕訳	計　4冊
58	津和野用達所関係（村穂梅治）	計　10冊
59	登記	計　2冊
60	山林	計　14冊
61	殖林勘定帖	計　3冊
62	貸金関係往復書類	計　11冊
63	俸給旅費帖（堀氏）	計　31冊
64	給料簿	計　4冊
65	通話録（堀氏）	計　6冊
66	害虫駆除油渡帖（地所部）	計　7冊
67	使役人内渡・米金請求簿（堀氏）	計　3冊
68	使役人判座帖（堀氏）	計　5冊
69	使役人作業日誌	計　2冊
70	雇人帖（堀氏）	計　8冊
71	雇人寄留名簿（戸籍抄本）	計　2冊
72	夜番・宿直	計　8冊
73	（使用人関係色々）	計　8冊
74	役員・職員・家務規則等	計　6冊
75	諸入用帖（堀氏）	計　12冊
76	到来進物帖	計　31冊
77	諸品買物帖・臨時買物帖	計　23冊
78	当座物品貸付帖（堀氏）	計　13冊
79	諸始末帖（堀氏）	計　12冊
80	諸向應接必要件記録（家務部）	計　3冊
81	註文品控	計　10冊
82	門屋勘定帖（堀氏）	計　9冊
83	薪炭勘定帖（堀氏）	計　28冊
84	織物並仕立物帖	計　10冊
85	本堀様御染物通（岩國屋幸十郎）	計　4冊
86	通運費（通信・運輸のこと也）	計　4冊
88	土地立木売却代金収入帖	計　3冊
89	山神社	計　4冊
90	書式・文例	計　2冊
91	諸請取帖	計　8冊
92	上納金領収書綴（堀氏）	計　3冊
93	銅山方金銭請払日計簿（堀氏）	計　13冊
94	銅山方仕入金支払帖（堀氏）	計　4冊
95	大正８年鹿足郡々費違法分賦書類	計　2冊
96	對三菱銀行関係書類	計　2冊
97	銀行関係	計　19冊
98	小作証書	計　217冊
109	小作・年貢・土地関係色々	計　16点
110	鉄道調査・敷地関係書類	計　2点

表0-2-8　堀氏鉱山総括資料目録一覧（３／３）

番号	名称	数量
111	忠魂碑建設関係書	計　8点
112	地所関係書類（堀氏）	計　21冊
113	各村地所関係書	計　9点
114	地所部参考書綴込	計　1点
115	土地建物売渡証書（堀氏）	計　8袋
116	各村土地売買契約書	計　12冊
117	地所家屋売買書類	計　4冊
118	普請帳	計　17点
119	住友銀行当座預金勘定帖（堀氏）	計　8冊
120	（長）長形帖簿色々	計　21冊
121	（長）大福米金貸帖	計　3冊
122	（長）「和泉屋」-本町角酒場-関係	計　6冊
123	（長）銅代金等	計　3冊
124	（長）金銭貸借帳	計　3冊
125	（長）普請・営繕・人遣関係	計　15冊
126	（長）豊田村横田に於いて田畑預米取立帳綴込	計　21冊
127	（長）年貢関係	計　14冊
128	（長）年貢米取立仮帖（板垣氏）	計　11冊
129	（長）長形帖簿「雑の部」	計　12冊
130	飯石郡頓原鉱泉所関係書類	計　3冊と5袋
131	公文書綴	計　21冊
132	別荘（お部屋）普請関係書類	計　3冊と4袋
133	諸参考書・雑書綴	計　58冊
135	山神社祭礼及建築関係	計　1括袋
136	堀伴成　濱田県勤務時代文書	計　8点
137	見島一件書類	計　2箱
138	須佐別荘工事関係書類	計　1箱
139	捕鯨事業関係書類	計　1箱
140	浜田県・島根県　布告書綴	計　1箱
150A・B	石見水力電気株式会社関係	計　2箱
151A・B・C	石見製紙会社関係	計　3箱
152A・B	畑迫病院関係書類	計　2箱
153	往復文書綴・文通控類	計　1箱
154A・B	慶事関係書類	計　2箱
155	西光寺関係	計　1箱
156	貸金証文	計　1箱
157	太政官日誌	計　1箱
158	所得取調及税金関係書類	計　1箱
159	袋入書類	計　4箱
163	道路改修其他綴物	計　1箱
164A・B	笹谷訴訟書類	計　2箱
165A・B	石ヶ谷係争関係	計　2箱
166	家庭	計　1箱

エ　仏像調査

津和野町の仏像調査はこれまでに行われたことはなく、今回初めて専門的な調査が実施された。調査は、まず全寺院を対象にアンケート調査を実施し、そのうち津和野城下にあって嘉永６年（1853）の城下全体を焼けつくした大火の際に残ったといわれる永明寺および大定院、興海寺（昭和になって再建）の所蔵する仏像について、奈良大学の協力のもと調査を実施した。

幕末の大火、さらには藩主が国学を重んじ神道を学んでいたことから、福羽美静に寺院を整理させ、その際に整理統合させられた寺院も多く、城下における寺院の古い資料の残存状況は良いとはいえない。アンケート調査の結果だけをみると仏像をはじめ寺院関係の資料調査は困難であるが、仏像をはじめ古文書について所有者の理解のもと、継続的に調査を進めていく必要がある。

なお、今回の調査において、日原地区の丸立寺にある羅漢堂および内部に保管されている十六羅漢については、江戸後期の作とされ、堀氏によって設置されたことが判明した。県内でもこれほど状態の良い十六羅漢は見当たらず、今後詳細な調査を行う必要がある。



仏像調査風景

表0-2-9　仏像調査リスト（１／２）

No.	所在	名称	像高（cm）	最大幅（cm）	時代	品質構造	備　考
1	永明寺	釈迦如来坐像	39.5	30.9	江戸時代	寄木造	本尊、釈迦三尊中尊
2		文殊菩薩坐像	26.3	18.3	江戸時代	寄木造	釈迦三尊左脇侍
3		普賢菩薩坐像	36.9	18.2	江戸時代	寄木造	釈迦三尊右脇侍
4		阿弥陀如来立像	36.5	10.5	江戸時代	寄木造	厨子入
5		釈迦誕生仏立像	15.2	6.5	江戸時代	鋳造	
6		千手観音立像	15.2	5.1	明治以降	木造	
7		尊牌	－	21.3	江戸時代	木造	亀井茲親寄進
8		烏芻沙摩明王立像	20.5	10.2	江戸時代	寄木造	
9		大権修利菩薩倚像	－	42.4	江戸時代	寄木造	
10		十六羅漢坐像	－	38.7	江戸時代	寄木造	羅漢像8躯
11		浄如菩薩坐像	－	38.6	江戸時代	寄木造	
12		十六羅漢坐像	－	－	江戸時代	寄木造	羅漢像8躯
13		僧形立像	36.5	11.8	江戸時代	一木造	
14		道元坐像	－	44.6	江戸時代	寄木造	沓台裏に墨書銘有り
15		月因性初坐像	－	43.9	江戸時代	寄木造	
16		秀峰繁俊坐像	－	42.1	江戸時代	寄木造	
17		亀井茲矩坐像	62.8	95.3	江戸時代	寄木造	
18		菩薩坐像	29.8	29.5	江戸時代	寄木造	
19		韋駄天立像	24.9	8.6	江戸時代	一木造	台座裏に墨書銘有り
20		弁財天立像	15.5	6.8	江戸時代	木造	
21		恵比寿坐像	13.1	8.1	江戸時代	一木造	像底に墨書銘有り
22		大黒天立像	12.6	8.5	江戸時代	一木造	像底に墨書銘有り
23		大日如来坐像	38.1	28.4	鎌倉時代	寄木造	胎内に墨書銘有り
24		釈迦如来坐像	14.6	12.3	江戸時代	寄木造	造像由来の書付が付属する。法橋一運作
1	興海寺	釈迦如来坐像	29.8	24.3	鎌倉時代	寄木造	本尊
2		如意輪観音	22.7	13.7	江戸時代	木造	厨子入
3		釈迦諸尊像	8.9	5.7	江戸時代	木造	厨子入。法量は釈迦如来坐像。厨子高41.4、厨子幅37.8
4		聖観音坐像	24.7	15	江戸時代	木造	
5		十一面観音坐像	17.5	10.4	江戸時代	木造	厨子入、厨子高49.8、厨子幅32.1
6		神将形立像	10.2	5.8	江戸時代	木造	厨子入、No.5十一面観音像左脇侍
7		地蔵菩薩立像	9.3	3.8	江戸時代	木造	厨子入、No.5十一面観音像右脇侍
8		釈迦如来坐像	15.2	11.6	江戸時代	寄木造	六角框座裏に墨書銘有り
9		尊牌		15.5	江戸時代	木造	永代院旧什物

表0-2-9　仏像調査リスト（２／２）

No.	所在	名称	像高 (cm)	最大幅 (cm)	時代	品質構造	備　考
10		菩薩形坐像	10.5	7.5	江戸時代	木造	厨子入、厨子高27.3、厨子幅15.4
11		聖観音立像	21.7	10.7	江戸時代	木造	
12		菩薩形坐像	16.8	12.5	江戸時代	寄木造	
13		釈迦誕生仏立像	13.6	6.5	江戸時代	鋳造	
14		大権修利菩薩倚像	－	－	江戸時代	－	
15		十六羅漢坐像	－	30.6	江戸時代	寄木造	羅漢像8躯。第十番、半諾迦尊者像
16		達磨大師坐像	－	－	江戸時代	－	
17		十六羅漢坐像	－	－	江戸時代	寄木造	羅漢像8躯
18		十一面観音立像	88.3	39.3	江戸時代	寄木造	
19		毘沙門天立像	56.1	34.9	江戸時代	寄木造	
20		不動明王立像	87.4	30.4	江戸時代	寄木造	
21		不動明王立像	56.7	24.6	江戸時代	一木造	
22		不動明王立像	60.7	33.1	明治以降	一木造	
23		道元坐像	－	29.4	江戸時代	寄木造	沓台裏に墨書銘有り
24		瑩山紹瑾坐像	－	29.5	江戸時代	寄木造	椅子裏および沓台裏に墨書銘有り
1		釈迦如来坐像	26.5	22.2	室町時代	寄木造	本尊、釈迦三尊中尊
2		文殊菩薩坐像	24.5	11.7	江戸時代	寄木造	釈迦三尊左脇侍
3		普賢菩薩坐像	26.5	12.2	江戸時代	寄木造	釈迦三尊右脇侍
4		道元倚像	－	29.8	江戸時代	寄木造	反古紙下地。表面彩色は後補
5		瑩山紹瑾倚像	－	29.4	江戸時代	寄木造	紙下地。表面彩色は後補
6		釈迦誕生仏立像	14.4	7.2	江戸時代	鋳造	木製六角框座裏に墨書銘
7		狛犬	5.1	－	江戸時代	土製	一対、法量は向かって右像
8		位牌	－	17.3	明治以降	木造	
9		達磨大師坐像	－	28.2	江戸時代	寄木造	
10		大権修利菩薩倚像	－	27.5	江戸時代	寄木造	
11		迦葉尊者立像	35.4	10.9	江戸時代	寄木造	
12	大定院	阿難尊者立像	35.6	13.3	江戸時代	寄木造	台座裏に墨書銘有り
13		菩薩形坐像	27.1	18.1	江戸時代	寄木造	
14		十一面観音坐像	22.9	16.1	江戸時代	寄木造	
15		秀峰繁俊倚像	－	30.4	江戸時代	寄木造	大定院開山師。反古紙下地
16		弘法大師坐像	51.3	50.4	江戸時代	木造	厨子入
17		鏡	－	－	江戸時代	銅・木造	鏡直径17.8、幅雲形部27.5幅地付27.7。鏡背面、鏡台に銘有り
18		六地蔵像	53.5	17.6	江戸時代	石造	法量は本堂向かって右列中央像。台座に銘有り
19		地蔵菩薩坐	52.5	60.5	江戸時代	石造	
20		毘沙門天立像	12.6	5.3	江戸時代	木造	框座裏に墨書銘有り
21		韋駄天立像	12.8	5.4	江戸時代	木造	框座裏に墨書銘有り



永明寺（大日如来坐像・鎌倉時代）



興海寺（釈迦如来坐像・鎌倉時代）

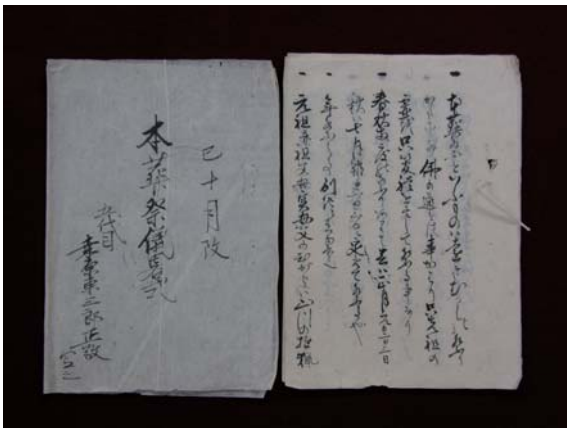


大定院（釈迦如来坐像・室町時代）

オ　その他文書調査

島根県が昭和52、53年にまとめた「島根県古文書等所在確認調査報告」に掲載の文書について所在確認調査を行うとともに、新たな資料の発見に取り組んだ。すでに30年以上が経過し、すでにその所在が不明になっているものもあった。今後は所有者に対し資料の保管についての意識づけを継続的に行っていく必要があるとともに、所有者による保管が困難になった場合には郷土館等で受け入れができるよう、収蔵庫などの整備を行い、受け入れ体制を整えていく必要もある。

また、第１次調査において桑原家文書、椿家文書、木村家文書、登米家文書など新たに発見されたものがある。今後は専門家の協力を得て詳細な調査を進める必要がある。



桑原家文書



椿家文書



木村家文書



登米家文書



津和野町民俗資料館



日原歴史民俗資料館

（２） 無形文化財

① 演劇、音楽、工芸技術

明治から昭和初期にかけて各地区において秋祭りなどで地芝居が行われていたことが判明したが、それらは今日人口の減少等で参加者がいなくなり、その多くが失われてしまっている。唯一、木部地区において一時は廃れてしまっていた地芝居、歌舞伎が昭和50年代に復活し、地元有志によって冨長山八幡宮の秋の大祭において毎年順番に行われている。

また、音楽、工芸技術については今回詳細な調査結果は得られなかった。



中曽野の地芝居

（３） 民俗文化財

① 無形民俗文化財

現在、「弥栄神社の鷺舞神事」が国の重要無形民俗文化財に、「津和野踊」と「柳神楽」が県指定文化財に指定されている。また、鷲原八幡宮の「流鏑馬神事」と津和野地区の「奴行列」は町指定となっている。指定はされていないが、日原地区、青原地区で行われている「奴行列」、日原地域で盛んな「石見神楽」、畑迫、木部、須川地区で行われている「田植え囃子」などは、明治以降町内に広く分布しており、今後その歴史的背景を詳しく調査した上で、評価していく必要がある。

さらに青原天満宮の「網代」、津和野地区における「輪くぐり神事」、比較的新しい「乙女峠祭り」や「子鷺踊り」など、地域を特徴づける行事についても今後保存ための対策を必要とするものもある。

これ以外にも青野山の「日参様」、地倉沼の「地倉権現祭り」など自然崇拝による伝統的な行事についても多くが把握、整理されており、今後詳細な調査を行う必要がある。



網代（青原地区）



石見神楽



子鷺踊り（津和野地区）



乙女峠祭り

表0-2-10　民俗芸能・民俗行事リスト

区分	NO	名　称	分類	特徴	区域
民俗芸能	1	津和野弥栄神社の鷺舞	神事	京都より山口経由して移ったもので城主吉見大蔵正頼が疫病鎮護のため自領に輸入	津和野（橋北）
	2	津和野踊	盆踊り	一名念仏踊りといわれる技法をうけている	津和野（橋北）
	3	鷲原八幡宮の流鏑馬	伝統④	津和野	津和野（橋南）
	4	千原座社中	石見神楽	千原神楽・八千代神楽	木部
	5	中山田植囃子	田植囃子	永森山八幡宮例祭に踊る、江戸末期から	木部
	6	高峯田植囃子	田植囃子		畑迫
	7	奴行列	伝統④		小川
	8	太子講	信仰	弘法像を祠から出し、祭礼を行う	畑迫
	9	木の口神楽社中	石見神楽	千原神楽・八千代神楽	
	10	柳の舞	舞	30幾通りの舞がある	
	11	柳神楽（石見神楽）	石見神楽		柳
	12	青原奴道中	伝統④	天文三年に青原八幡宮に奉納した	青原
	13	神楽	石見神楽		左鐙
	14	相撲ヶ原田植囃子	田植囃子	須川八幡宮例祭で踊る	須川
民俗行事	15	地倉権現祭り	信仰	毎年５月、１１月	小川
	16	地鎮申し	信仰	五穀豊穣を神様に感謝する。農家の神事。	小川
	17	秋祭り	信仰	大元神社にて１０月開催	小川
	18	鎮守祭	信仰	鎮守様の祭、春秋２回開催	小川
	19	子安観音様通夜	信仰	麓耕子安観音は、皆から観音様と親しまれ、毎年８月１７日に当屋の泉にお迎え（現在自治会館）全世帯２０戸が集い心尽くしのごちそうを持ち寄って語らうお通夜を行っている。	小川
	20	地鎮申し	信仰	農家の神事、１月に開催	小川
	21	やなぎまいり	信仰	盆におこなっていたが近年はおこなっていない	小川
	22	地鎮申し	信仰	全集落参加	小川
	23	秋祭り	信仰	五穀豊穣を神様に感謝する。農家の神事。１０月中旬	小川
	24	青野山の山焼き	自然	青野山北斜面で上山と下山を一緒に焼く。昭和３５年まで続いていた。	小川
	25	三渡八幡宮の例大祭	信仰	秋の大祭	堤田
	26	堤田の盆踊り	信仰	毎年8月14日に行われ口説きは安来節保存会、豆口説、ヨーソレ、平左口説が踊られる	堤田

②　有形民俗文化財

町内には津和野町民俗資料館と日原歴史民俗資料館があり、大庭良美氏によって昭和40年代～50年代にかけて町内の民俗調査が行われ、資料の整理が行われている。津和野地区では武家にまつわる衣装や道具、商家にまつわる看板や民具などが、日原地区では農具や漁具、和紙の生産に関する民具などが整理、展示されている。すべて調査カードが整理されており、今回重点的な調査は行っていない。

しかし、１次調査において新たに把握されたものもあり、今後も調査を継続していく必要がある。



津和野町民俗資料館



日原歴史民俗資料館

（４） 記念物

① 史跡

ア 中世山城と近世津和野城

中世山城においては三本松城（津和野城）を始点として畑迫、木部、日原地区へと時計回りに山城が築かれていることが分かる。そのうち重要な拠点の一つであった日原地区の下瀬山城はすでに町指定史跡となっているが、戦国期に大内氏の家臣であった陶晴賢の津和野城襲撃の際に陣を張ったといわれる陶ヶ嶽や茶臼山城跡、さらには木部地区の御嶽城は未指定であり、今後の指定向けた調査が必要である。



陶ヶ嶽



茶臼山城跡

イ　津和野藩邸および藩邸庭園「嘉楽園」

津和野藩邸については、平成18年度に部分的に発掘調査（１×２ｍトレンチ）を実施し、遺構の一部が確認され、平成19年度に津和野城跡の一部として追加指定されている。発掘調査箇所については現在残されている幕末ごろのものと思われる絵図をもとに位置を決めており、およその建物範囲については確認することができた。

藩邸の建物については亀井温故館所蔵の平面図が最も参考になるが、大広間および門（大手門か？）が明治５年に解体された後、浜田県庁舎として浜田に移築された。その後明治12年からは那賀郡役所として、戦前、戦後は那賀地方事務所として使用され、昭和41年に解体されている。現在当時の写真が残されており、津和野藩邸の往時を忍ばせる貴重な写真と言える。門は現在浜田城の二の丸から本丸への入口に移築されている。また、藩邸内の部屋を仕切る板戸（津和野藩の絵師による絵画あり）が解体後町内に払い下げとなり、古民家に現在もなお使用されていることが判明。建物調査に合わせ調査を行ったところ、その数が数十枚にのぼることが判明している。美術工芸品としても価値の高いものである。

津和野藩邸の庭園「嘉楽園」についても、平成19年度に史跡として追加指定されており、藩邸と一体としての保存を今後検討していく必要がある。



嘉楽園（現状）

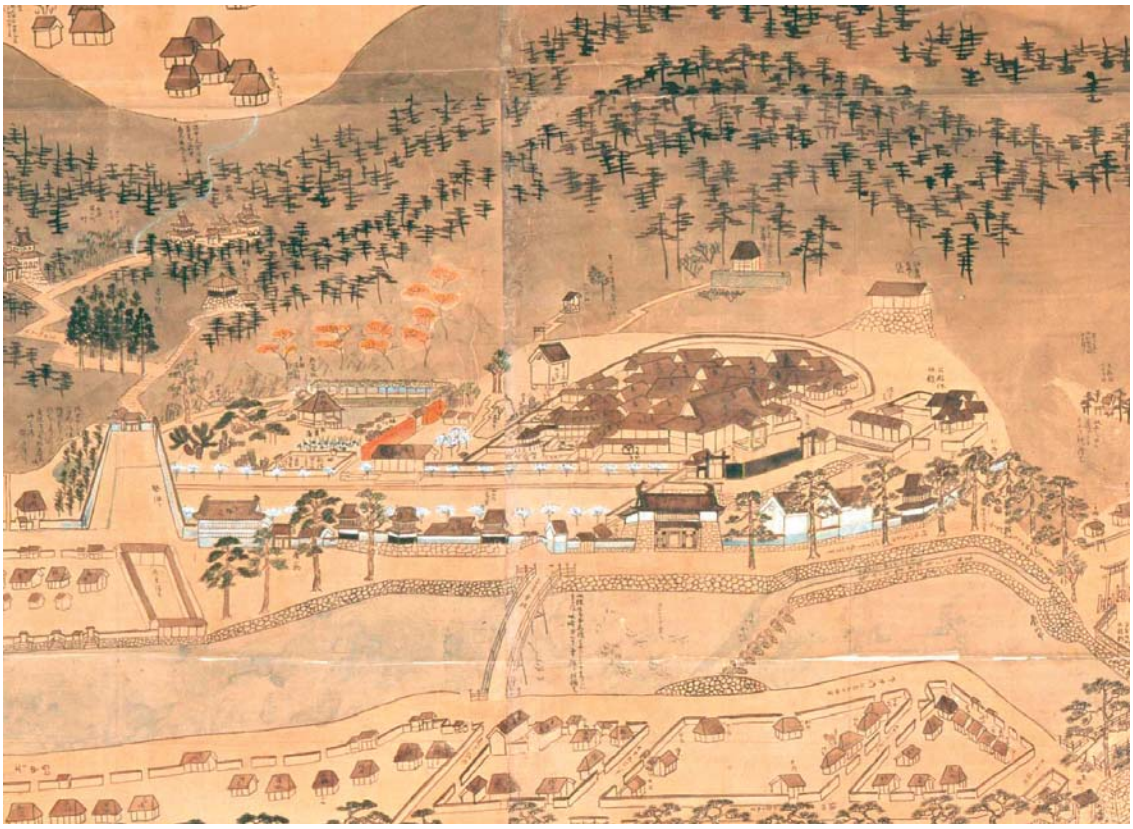
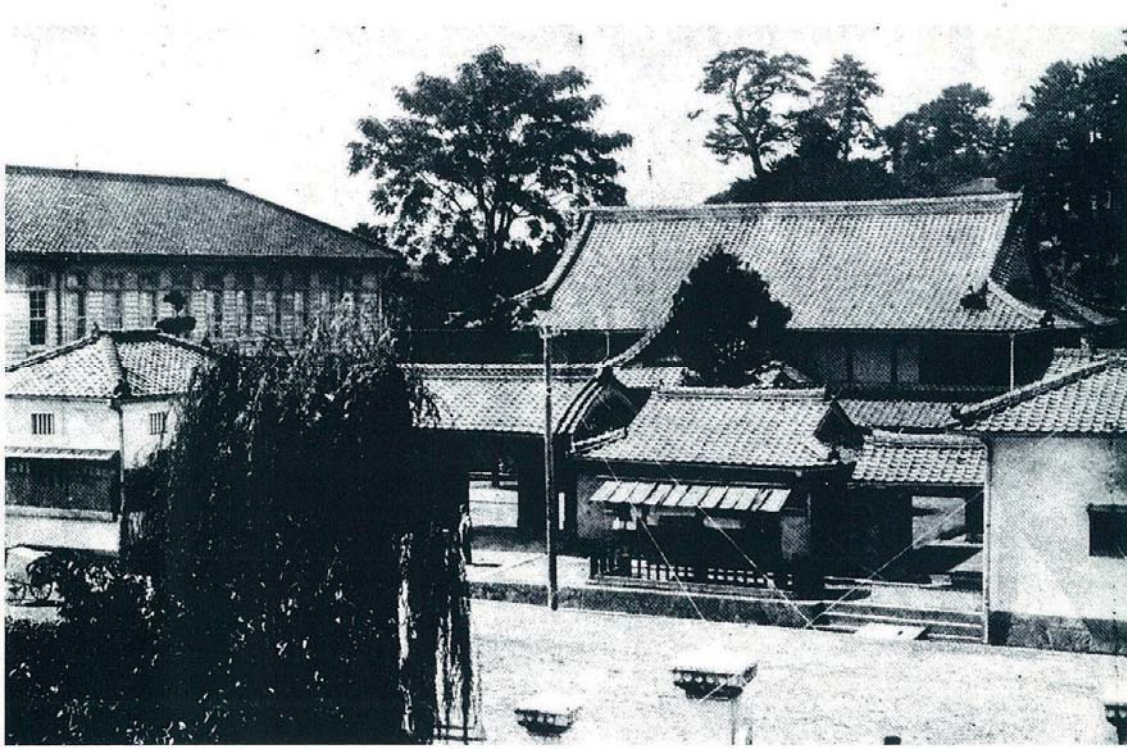


図0-2-9　津和野藩邸図（大正３年作成）



浜田市に移設された津和野藩邸大広間部（昭和41年に解体）　　浜田市教育委員会蔵

ウ　津和野城下町主要史跡群

江戸時代の城下町については、全ての範囲（鷲原八幡宮および流鏑馬馬場、山陰道の口屋番所までを含む）の地下部分について城下町遺跡として周知の遺跡とし保護の対象としている。城下町内およびその周辺にあって現在もなお、良好にその地形、利用形態を残している永明寺他６か所の主要史跡について、地下遺構とともに津和野城下町主要史跡群として今後保存を図っていく必要があると考えている。今回のモデル事業においては計７か所については地形測量を行い、図化作業を行っている。このうち亀井家墓所および鷲原八幡宮の社殿（本殿、拝殿、楼門）については、詳細な調査について専門化や研究機関などとともに実施し別途報告書としてとりまとめている。他の史跡についても今後段階的に調査を実施し、文化財指定を目指す。

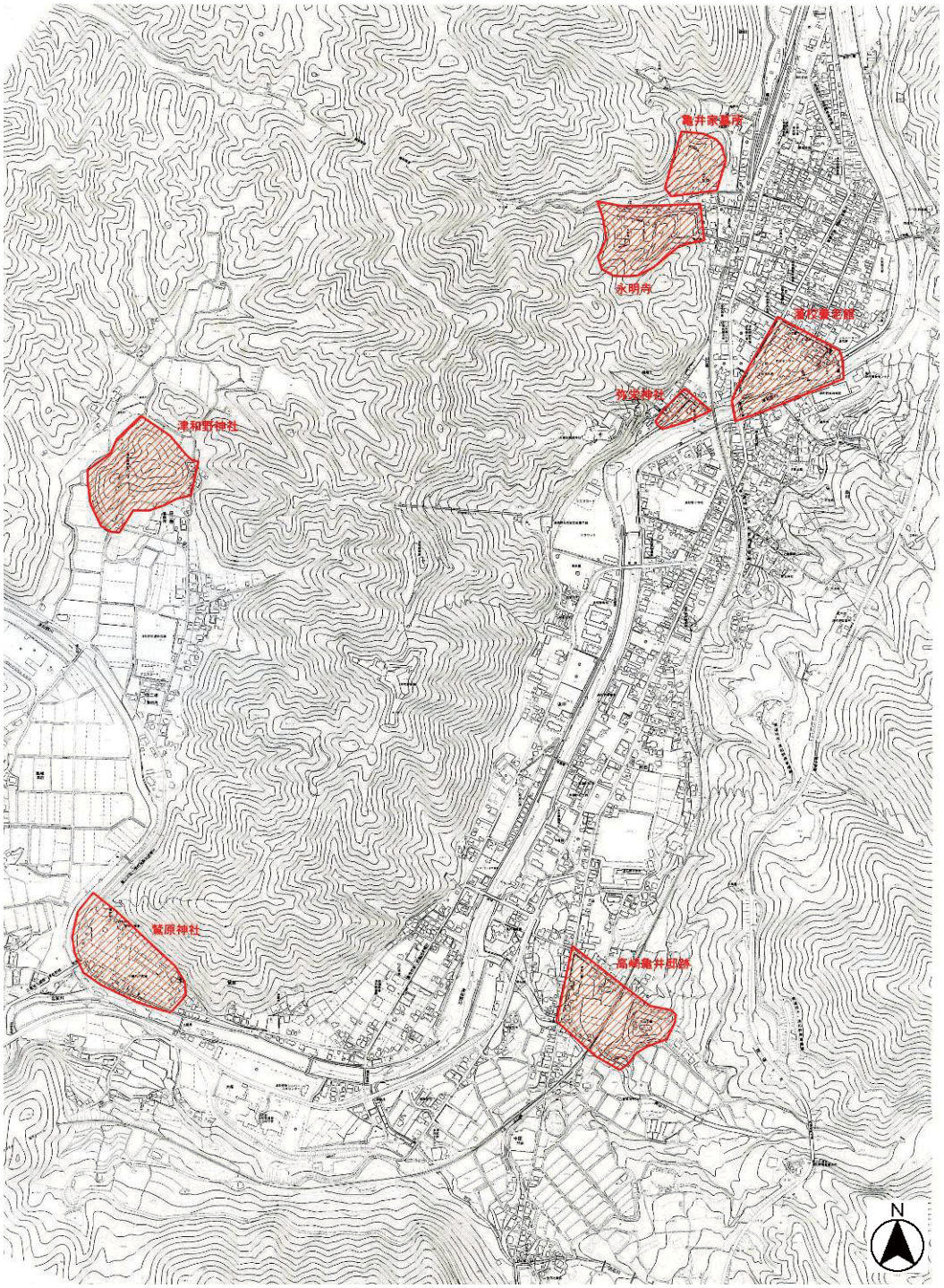


図0-2-10　津和野城下町主要史跡群

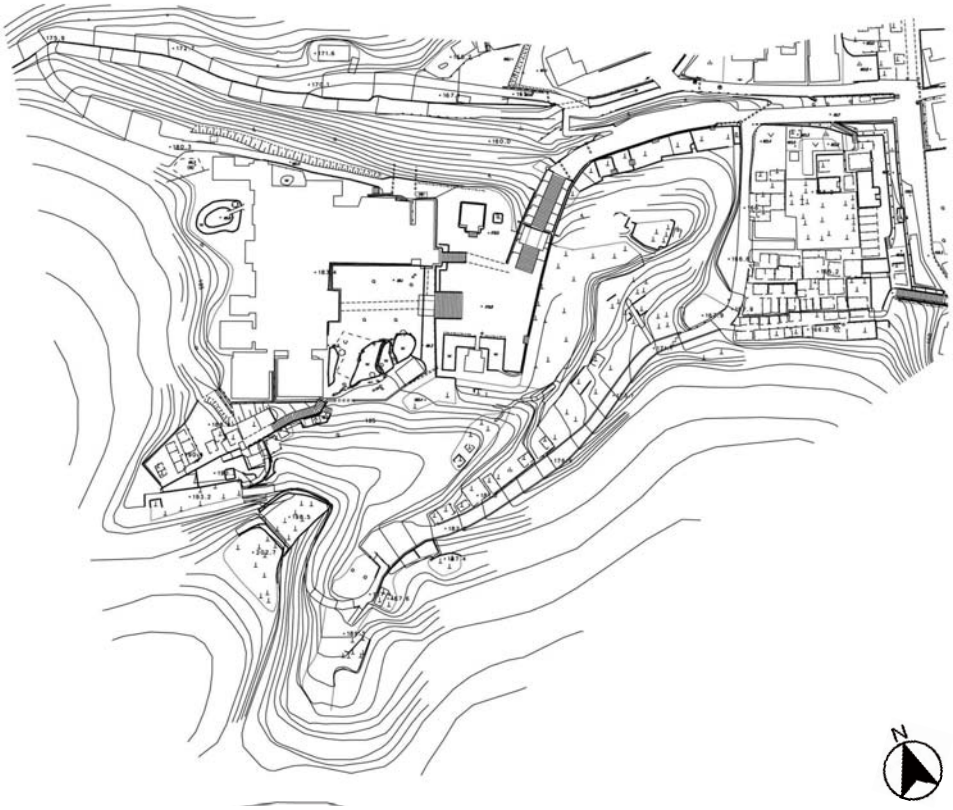


図0-2-11　永明寺配置図

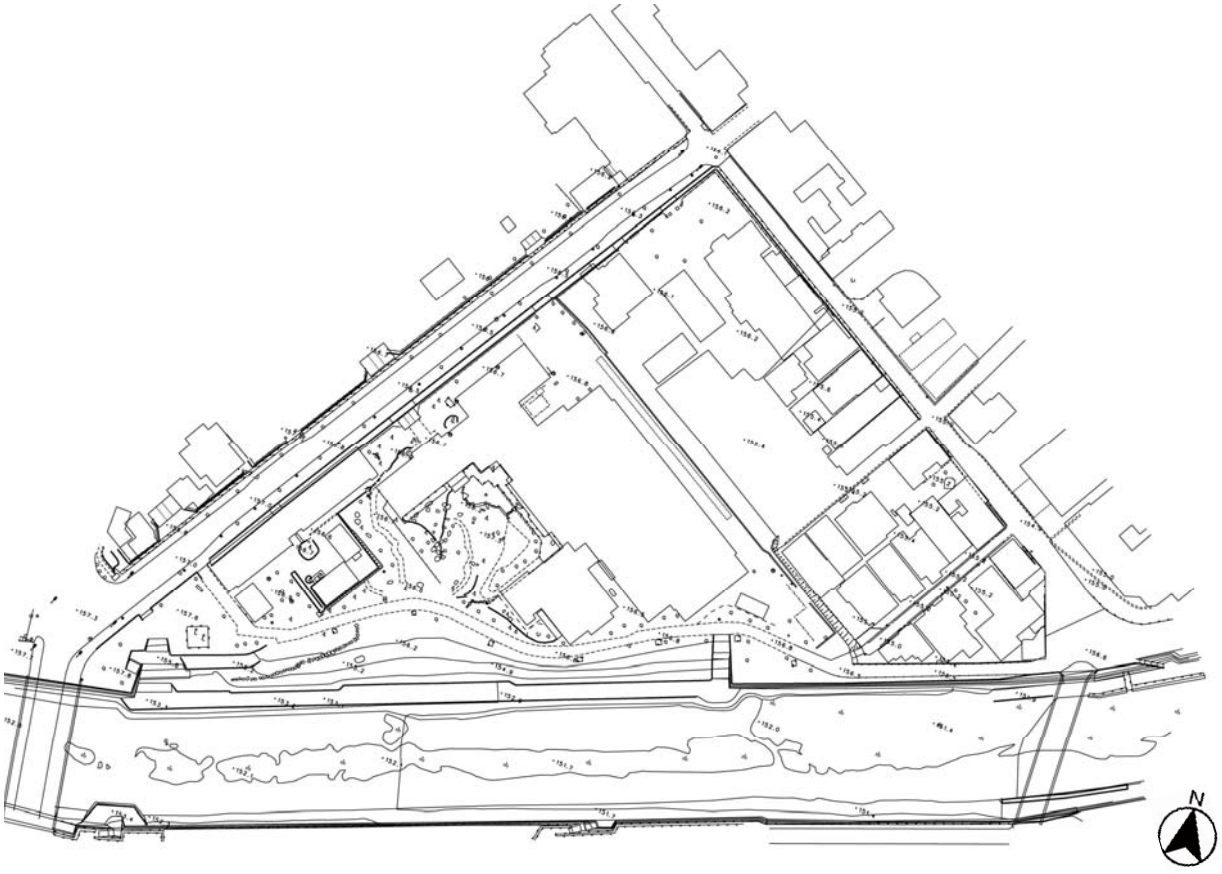


図0-2-12　藩校養老館配置図



図0-2-13　亀井家墓所配置図



亀井家2代政矩墓石



亀井家11代茲監墓石



図0-2-14　弥栄神社配置図

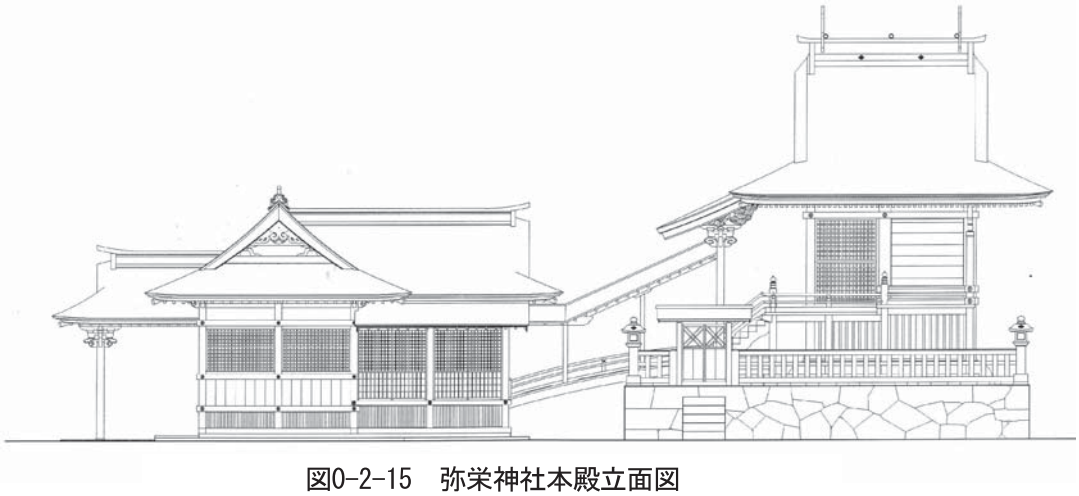


図0-2-15　弥栄神社本殿立面図

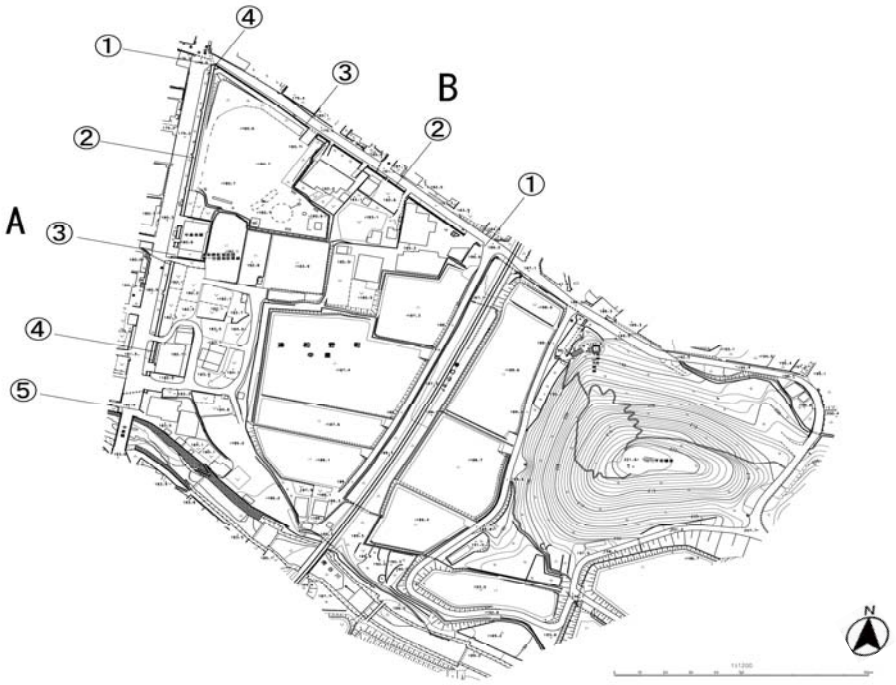


図0-2-16　高崎亀井家跡配置図

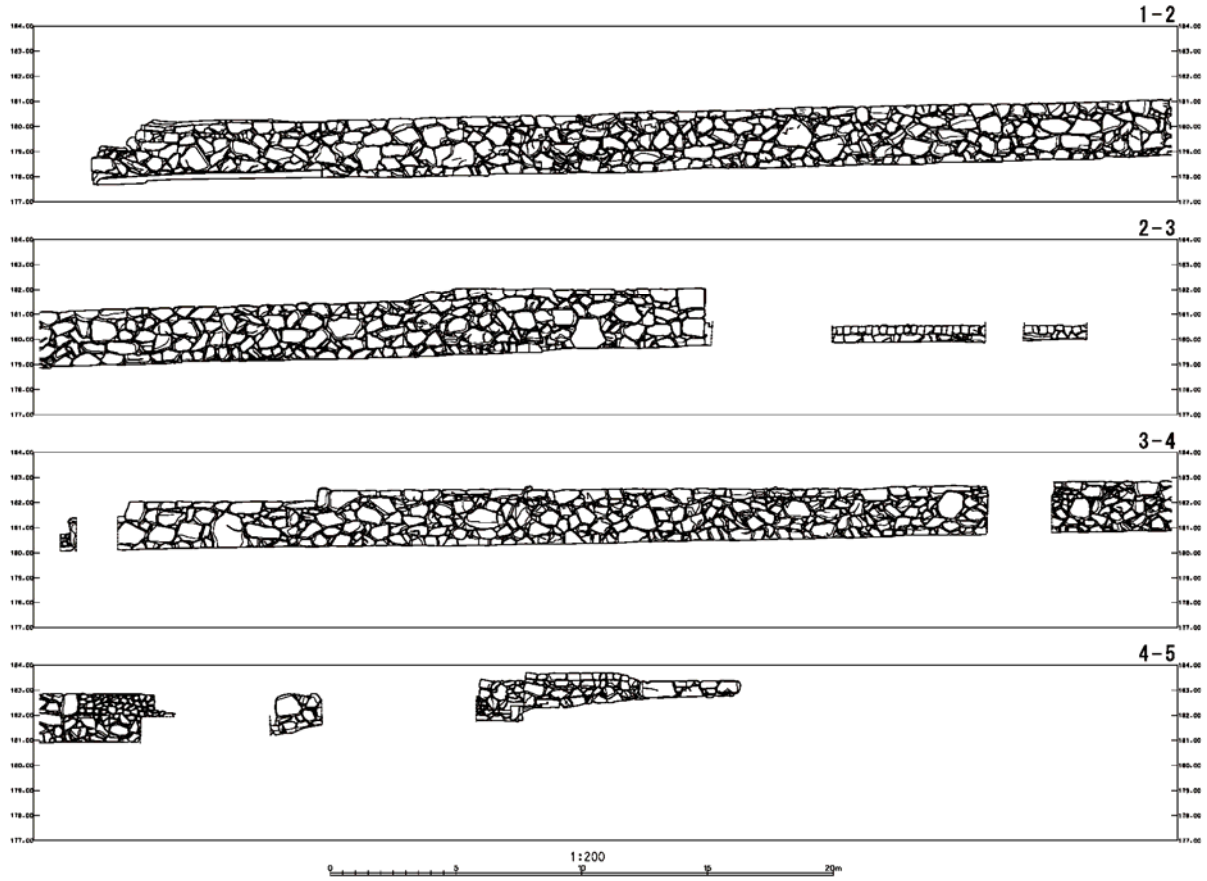


図0-2-17　高崎亀井家石垣立面図Ａ

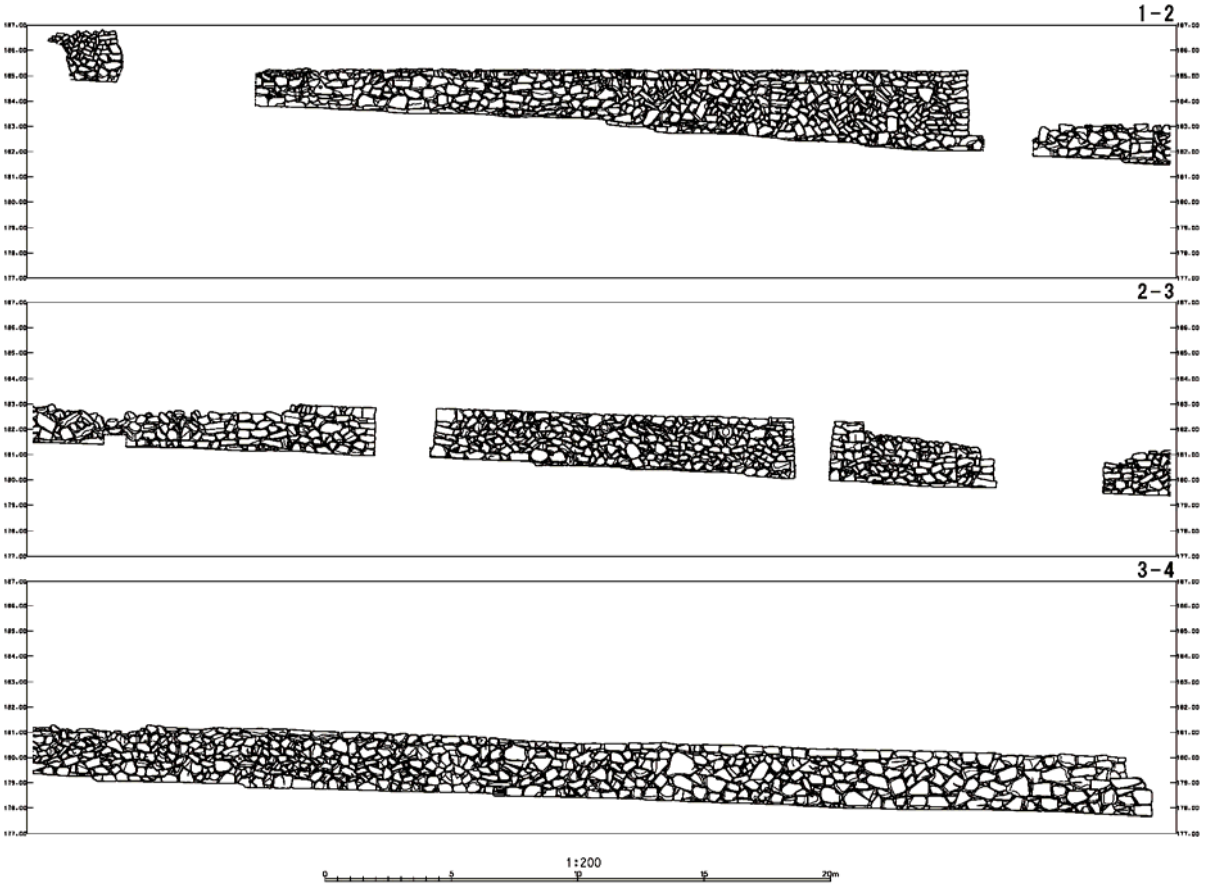


図0-2-18　高崎亀井家石垣立面図　Ｂ



図0-2-19　津和野神社配置図

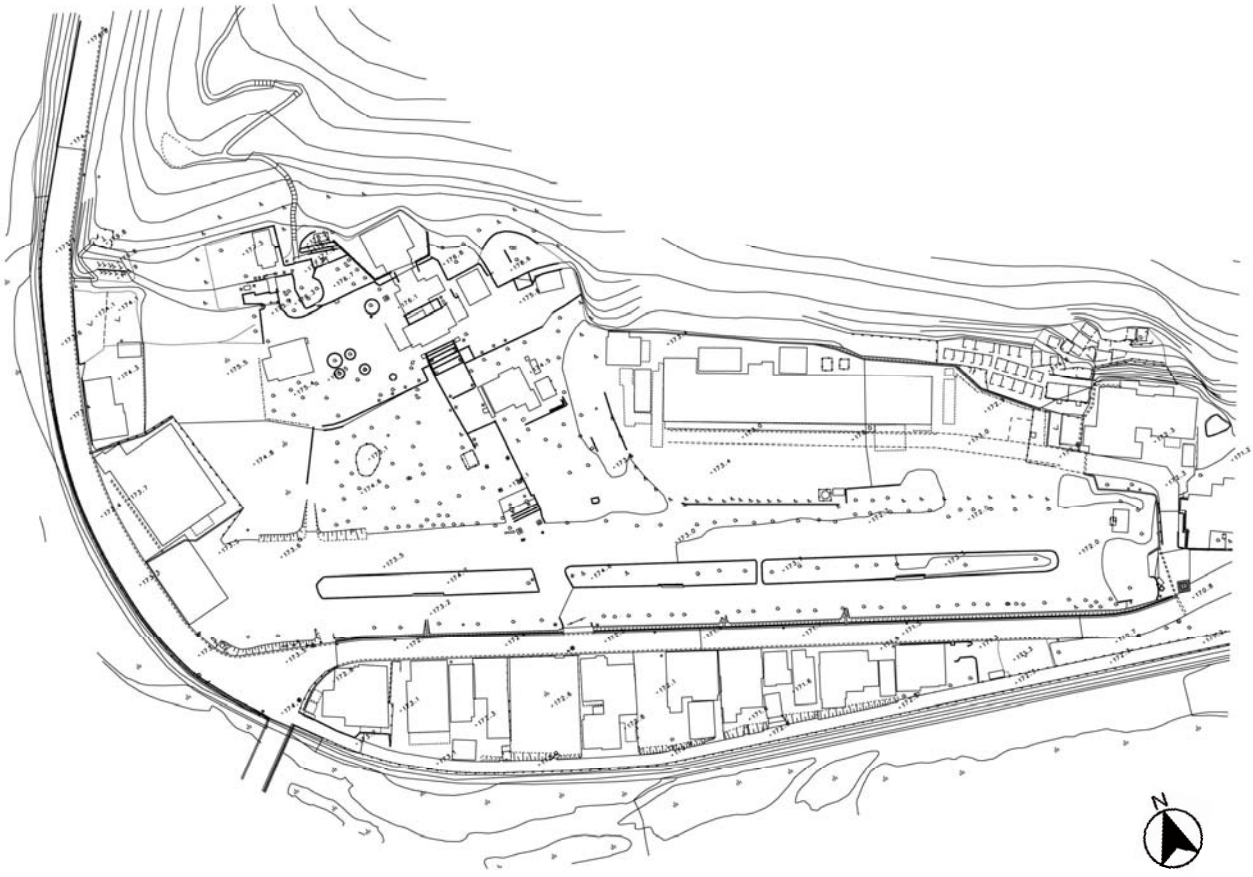


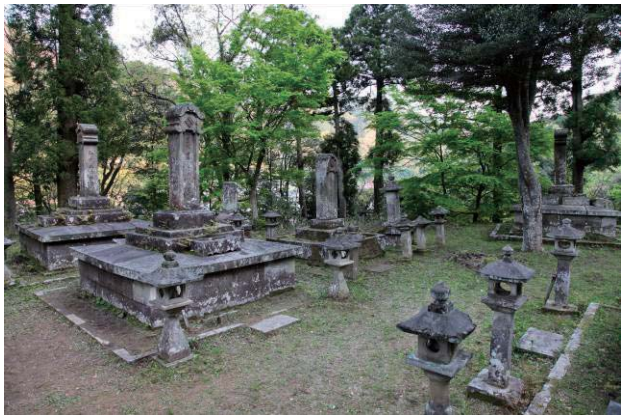
図0-2-20　鷲原八幡宮配置図



永明寺



永明寺庫裡



亀井家墓所



亀井家墓所



弥栄神社



弥栄神社欅



高崎亀井家跡



高崎亀井家跡（丸山公園）



津和野神社



津和野神社宝物



鷲原八幡宮



鷲原八幡宮流鏑馬馬場

② 名勝

名勝としては、平成17年度に名勝に指定された堀氏の庭園、旧堀氏庭園がある。このほか名勝の候補としては、庭園では歴代藩主の菩提寺にある永明寺庭園が、公園としては天保期以前からすでに「公園」と呼ばれていた鷺原公園（鷺原八幡宮と流鏑馬馬場）と堀氏の遊園の場であった「旧川園」などがある。

現在では一部が残されてはいるものの、池庭部分が地形的にも利用形態としても変わっている（昭和30～42年に建設された町営住宅19棟と太皷谷稲成神社の参道が池庭を横断している。）津和野藩邸の庭園「嘉楽園」については、平面図や津和野百景図、藩邸内絵図（亀井温故館所蔵）などの歴史資料が多数残っており、当時の様子がおよそ判明していることから、町営住宅の将来的な撤去について検討を進めるとともに、部分的に発掘調査を行い、遺構の残存状況を把握していく必要がある。将来的には藩邸とともに復元してくことも視野にいれていく必要がある。

この他津和野町には、島根県第１号の登録名勝「亀井氏庭園」がある。今回のモデル事業において、前述の登録有形文化財群の調査を行い、それぞれの屋敷に付属する池庭を調査した。池庭は主座敷から見て東は青野山、西は城山、南は陶ヶ嶽を借景とするように配置され、調査の結果、一部に江戸時代から続く煎茶の影響が庭作りにおいて見られることがわかった。津和野藩筆頭家老の多胡家には今でも煎茶の作法について描かれた扁額が残されている。これらの庭園の一部は測量を実施し、図化を行っている。今後すべての池庭について図化を行うとともに、建物と一体として保存できるよう文化財的価値を見出すことが必要である。

表0-2-11　町内庭園一覧

No,	名称	時代	構成要素	水系	指定有無
1	永明寺庭園	江戸～明治	築山、池、滝、園路、飛石、燈籠、植栽	谷水	
2	総霊社前庭	明治	池、燈籠、植栽	水路	
3	小野寺家中庭	江戸～明治	飛石、植栽	水路	
4	多胡家中庭	江戸	築山、池、園路、飛石、燈籠、植栽	水路	
5	下間家中庭	明治	池、園路、燈籠、植栽	水路	
6	沙羅の木中庭	江戸～明治	築山、池、園路、飛石、燈籠、植栽、祠	水路	
7	旧堀家中庭（神父館前）	明治	築山、池、燈籠	水路	
8	財間家住宅中庭	明治	飛石、植栽、石組、燈籠、水盤	無	
9	河田商店中庭	明治	石組、燈籠、植栽、祠、水盤	無	
10	分銅屋中庭	江戸～明治	飛石、燈籠、植栽	無	
11	ささや呉服店中庭	江戸	池、石組、燈籠、植栽、手水鉢、	井戸	
12	古橋酒造中庭	大正	池、石組、飛石、燈籠、植栽	井戸	
13	海老舎商店中庭	明治	石組、飛石、燈籠、植栽、手水鉢	無	
14	橋本酒造場中庭（翠雲園）	江戸～明治	池、八ツ橋、石組、築山、燈籠、植栽、祠	井戸	
15	華泉酒造場中庭	明治	池、飛石、石組、燈籠、植栽、手水鉢	井戸	
16	西周旧宅中庭	江戸	池、石橋、植栽	水路	
17	津和野藩邸庭園跡（嘉楽園）	江戸	無（埋蔵）	谷、勇水	史跡
18	高崎亀井家跡（丸山公園）	江戸	滝、滝石組	水路	
19	亀井氏庭園	明治	池、滝、八ッ橋、石組、築山、灯籠、園路、植栽、飛石、手水鉢	水路	登録記念物



永明寺庭園



旧川園



津和野藩邸「嘉楽園」



多胡家中庭



沙羅の木中庭



財間家住宅中庭



ささや中庭



橋本酒造場中庭

③　天然記念物

現在指定されている文化財は県指定が１件、町指定が９件となっている。今回の調査によって旧日原町において指定されていた日原地域における神社の社叢については、津和野地域にも多数存在しており、指定の対象としていく必要がある。また、津和野百景図にも多くが掲載されている滝についても、今回整理を行ったので、周辺環境の整備も含め今後指定に向けての調査が必要となる。

また、高津川の支流である横道川の源流である安蔵寺山およびその周辺のブナの原生林については県内でも珍しいものであり、また県立自然公園になっている青野山を中心とした青野火山群はお椀を伏せたような形をし、安山岩やデイサイトとよばれる特長的な岩石から成り立っている。また、これらは古くから信仰の対象となっており、今後詳細な調査および他との比較検討を行いながら指定を目指す必要がある。



青野山



安蔵寺山のブナ林



雄瀧



白糸の滝

（５） 文化的景観

① 高津川流域での生業と景観

高津川の源流域となっている中国山地は、日本の他の山地山脈と比べなだらかな形状であり、支流では滝や渓流が多数みられ、匹見川の一部は西中国山地国定公園に指定されているが、高津川は比較的緩やかな流れで河口に至っている。このため、古くから舟運が発達し、物資や人々が行き交っていた。また、山地部が主体であることから、森林が大部分を占め、水源涵養や生物の生息環境をはじめ多様な機能を果たしている。

津和野町についてみると、町域すべてが高津川流域であり、山地部を中心とする中に、高津川やその支流に沿って数多くの小規模な平地が形づくられ、典型的な中山間地域となっている。町域の南東側には、島根県で一番標高の高い安蔵寺山（1,263m）をはじめ、燕岳（1,079m）、香仙原（1,056m）といった千メートル級の山々が連なり、一部高津川などでとぎれるものの、そこから緩やかに下る形で、町域を囲んで稜線が連なる。また、独立峰である青野山（908m）が特徴的な姿で町域の南側に位置し、ランドマークにもなっている。

高津川やその周辺についてみると、山が迫った渓谷状の区域と、小規模な平地部による広がりのある区域によって景観的な特徴を形づくっている。加えて、朝霧の漂う高津川は、より地域を印象づけ、特徴づける景観でもある。

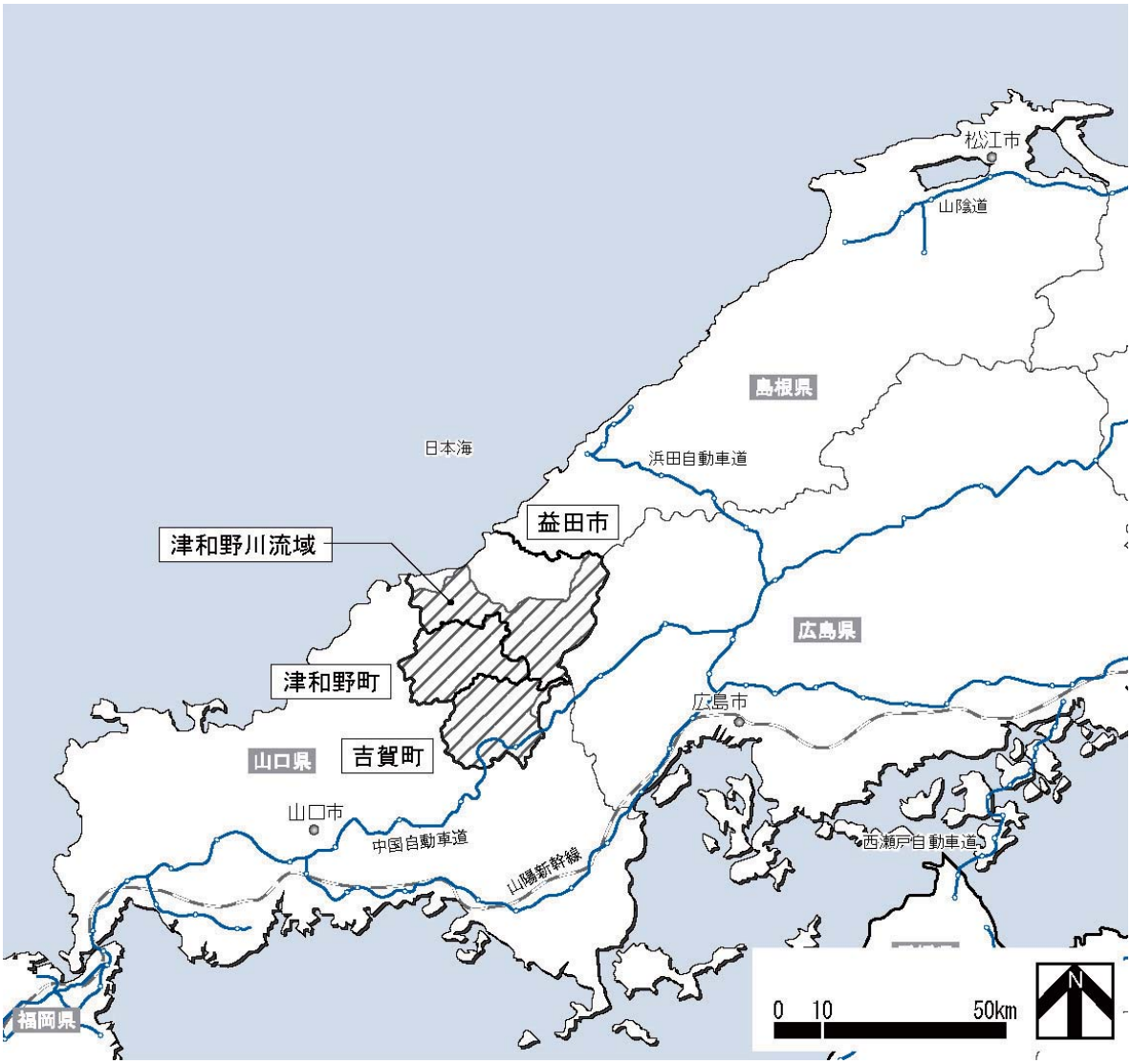


図0-2-21　高津川の流域

ア　高津川流域での生業と景観

高津川流域では、古くは縄文時代の遺跡が発見されており、古くから人々が住みはじめたことが分かっている。また、江戸時代には銅山やたたらの産地として、明治以降は営林署が置かれ、高津川は交通の重要な手段として利用されてきた。また高津川流域の自然の恵みを生かした生産活動も行われており、自然景観と一体となってすぐれた景観を構成している。

表0-2-12　高津川流域における主な生業と景観

テーマ	内　容
川漁と風物詩	清流がもたらす環境は、多様な生物を育み、アユ、ツガニなどは特産物になっている。特に高津川のアユは、香魚の名にふさわしい香りと味を備え、全国的に名声を得ており、川漁も盛んに行われ、アユ釣りの川としても知られて、風物詩でもある。
ワサビとワサビ田	高津川流域の山地部の渓流などを利用し、ワサビの栽培が行われており、特に津和野町南東部の左鐙地区で盛んである。支流の小さな川、流れをさかのぼっていくと、両側からブナ林などが迫ってくる小さな谷間に、自然地形を生かす形でワサビ田が築かれている。ワサビ田の手入れやワサビの収穫による人の存在と、自然と一体となったワサビ田は、森、木漏れ日、そして水の音や鳥のさえずりと相まって、静けさの中の文化的景観（風景）となっている。
稲作と棚田	高津川流域は山地部が中心であり、小規模な平地部だけでなく、傾斜地をも利用して稲作を行ってきた。そのため、高津川流域の各地に棚田が形成され、引き継がれてきた。しかし、農業の担い手の高齢化や後継者不足により、耕作放棄地が広がりつつあり、集落の維持が懸念される状況も生じている。 こうした中で、文化的・景観的にも棚田を評価しながら、都市住民等を含めた多様なネットワークを構築し、その保全・活用を図ることが求められる。
木材生産と森の景観	津和野町（旧日原町）には、かつて日原営林署が置かれ、多くの就労者が働き、木材を生産してきた。営林署が置かれるだけの、森林資源があり、その昔は高津川を利用して木材を下流部に移動させていた。現在も森林組合をはじめ製材を主とした産業が残っている。 伐採した後に植えられたスギ、ヒノキなどが育ち、自然林と合わせて、豊かな森の景観を形づくっている。
茶畑	津和野は古くから茶の産地。昼と夜の寒暖の差が大きく、朝霧に包まれる環境は上質な茶の育成に適している。高津川（津和野川）沿いの地形を生かして緑茶の茶畑が広がる。特にカワラケツメイという自生種を茎ごと炒ってつくる「ざら茶」や「まめ茶」は地域の特産品として広く愛飲されている。
狩猟と森の景観	高津川流域には豊かな森が広がっており、古くから狩猟が行われてきた。現在では、狩猟を専業とする人はいなくなったが、猟期になるとイノシシや鳥類などの猟が行われている。特に、安蔵寺山一帯は、ブナの原生林をはじめ、広大な森林地帯となっており、その麓付近である左鐙地区では、いまも肉食文化が息づいている。
たたら場の跡と遺跡の景観	高津川流域における砂鉄の採取と、森林資源（薪炭材）を利用して、近代製鉄が導入されるまでたたら製鉄が行われてきた。特に、左鐙地区で盛んに行われており、多くのたたら場の跡が残されている。



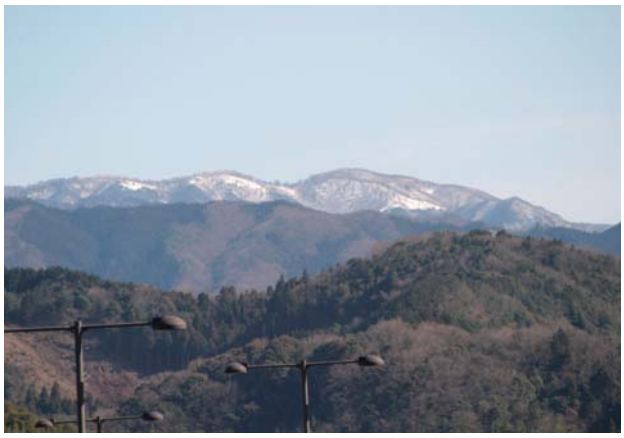
アユ漁



ワサビ田



左鎧の棚田



豊な森林と林業



茶畑



ブナ原生林

イ　高津川の食文化

高津川流域の食文化は、津和野城下のそれと比べ特長的である。城下においては海の幸を利用した料理が多く、一方で高津川流域においては鮎やうなぎ、カニなど淡水の魚を利用した料理が多い。さらにはイノシシやウサギなどの肉を使用した様々な伝統料理なども一般的に利用され、農村特有の食文化を有している。

表0-2-13　高津川流域における主な伝統料理や食材

川魚料理	○アユ飯、アユ寿司　　○鮎の粕漬け　　○雑煮:干し鮎と醤油ダシ ○うるかナス（アユのうるかで煮たナス）　　○ツガニとナスの煮物 ○うなぎ(蒲焼き)
食肉	○イノシシ　　○ウサギ　　○ヤマドリ
＜その他＞	○ワサビ漬け　　○タニシ煮　　○いも煮　　○煮しめ ○祭りのご馳走 ・押寿司　・雑煮(栗)　・いも煮　・サントウ(酢の物) ・ハス、タコ、ワカメ ○刺身に柚（柚の絞り汁をかける：殺菌効果、山間の地での生活の知恵）



アユ塩焼き



ツガニ

ウ　民俗芸能

島根県西部（石見地方）では石見神楽が盛んに行われ、津和野町でも多数の神楽団があり、そのうち柳神楽は県の無形民俗文化財に指定されている。

また、奴行列（道中）が町内各地で引き継がれており、高津川沿いの日原、青原でも行われている。



石見神楽



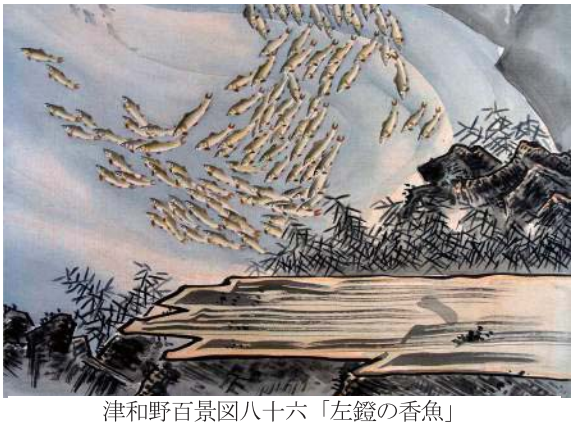
奴道中

エ　歴史的景観

高津川や流域の豊かな森と水は、舟運や川漁、農業、林業などの産業と暮らしを支えると同時に、歴史的にも地域の宝となる景観であったことが、近世に描かれた「津和野百景図」で表されている。



左鐙の高津川



津和野百景図八十六「左鐙の香魚」



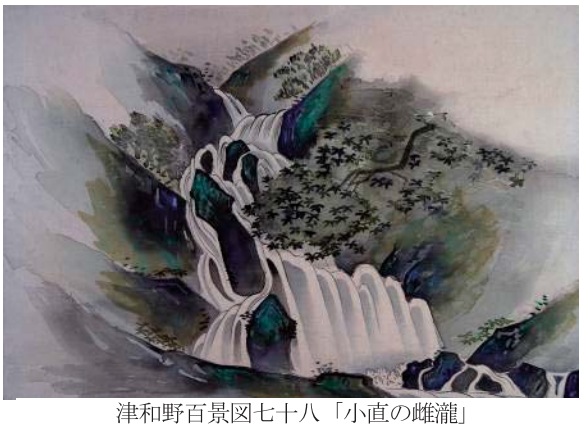
高津川（津和野川の合流する付近）



津和野百景図八十七「枕瀬の渡船場



現在の小直の雌滝



津和野百景図七十八「小直の雌滝」

＜津和野百景（高津川関係）と現状＞

②　石見瓦の街並み景観

津和野町の集落景観を特長づける赤い屋根瓦。これは釉薬を掛けて焼いた赤瓦で、石見地方で古くから生産される主要な産品である。耐火度の高い陶土と来待石を原料とする釉薬によって焼成された石見の赤瓦は耐寒、耐塩性に優れており、現在その生産量は三州瓦に継ぐシェアを占める。

今回の調査は、石見瓦の専門家により、津和野町内および隣接する市町村の一部について①歴史的建造物に使用されているもの、②窯跡や発掘資料など埋蔵文化財、③文献資料の点から調査を実施した。

今回の調査により、旧堀氏庭園、光明寺本堂、常光寺本堂資料が天明年間（1780年代）にさかのぼり、石見地方の赤瓦の中で最も古く位置づけられることが分かった。津和野藩内においては生産規模の大きな窯はこれまでのところ確認されておらず、嘉永の大火後から近代にかけて需用が増してきたものの、浜田や益田など他の領域から持ち込まれたものと考えられる。

今後は発掘調査に基づき年代の基準となる瓦資料を増やすとともに、生産窯跡の所在確認、新たに確認されている近世史料の解明に努めていくことが必要である。

表0-2-14　調査対象

項　目	調査対象
①歴史的建造物に使用されているもの	【津和野町】 旧堀氏庭園主屋（天明）　光明寺本堂（天明） 常光寺（天明）　水津家住宅蔵（文化） 藤井家住宅（文政）　宝泉寺羅漢堂（文政） 永明寺庫裏（幕末）　旧畑ヶ迫病院（明治・大正） 【吉賀町】 松浦家住宅主屋（明治）　小山家住宅主屋（明治） 竹内家住宅主屋（明治） 【益田市】 教西寺本堂（文化年間）
②窯跡や発掘資料など埋蔵文化財	【津和野町】 喜時雨窯跡（天明？）　裏門窯跡（天保） 朝王山窯跡（安政）　畑窯跡（不明） 津和野神社下方窯跡（近代）　津和野城跡（幕末） 津和野城下町遺跡（幕末）　笹ヶ谷銅山御用場跡（幕末） 【益田市】 仁右衛門山窯跡（文政）　北が迫窯跡（元治～明治） 相生窯跡（文政？）　羽原窯跡群（明治） 【その他】 東京都港区津和野藩江戸中屋敷出土瓦 山口県萩市萩城旧所用瓦
③文献史料の調査	「津和野藩亀井家江戸屋敷並京都屋敷関係図面」（津和野町郷土館蔵） 「津和野藩江戸上屋敷絵」（同上） 「光明寺由緒書」（光明寺蔵） 「寅春普請万覚帳」文化15・正（旧堀家史料　津和野町所蔵） 「本宅屋根葺替入用覚帳」天保9・3(同上) 「銅山御用場屋根瓦二仕替一条取計方扣」万延元・5(同上) 「遊歴雑記」 「家記稿本　邸宅及邸内鎮齋神祇之部」（亀井家蔵） 「津和野百景」栗本格齋 「萩藩閥閲録」



光明寺



常光寺旧所用瓦



朝王山窯跡



堀主屋鬼瓦



瓦調査風景



水津家蔵（日原）

（６） 伝統的建造物群

津和野町では、昭和60年度に「津和野地区伝統的建造物群保存対象調査報告書」をまとめているが、その後、重要伝統的建造物群保存地区の選定に向けた具体的な動きとなっておらず、長年の課題となっている。その後25年程度が経過し、建物の建て替えや空屋が増え、当時と実態が大きく変化してきている。

このような中、津和野地区を対象に古民家についても第１次調査において年代の確認調査を行った。農村部においては江戸～明治期にかけての茅葺屋根の農家が単独で存在するものの、群として存在している区域はない。江戸時代、銅の生産が盛んであった天領、日原地区においては一部歴史的な建造物が残されているものの、建て替えが激しく、群としては認められていない。

旧城下町である津和野区域においては、登録有形文化財の項でも述べたように全戸を対象に建築年代ごとのマップを作成し、伝統的建造物群保存地区となりうる範囲について検討を行った。その結果、昭和60年度に報告書にまとめた区域である後田・森地区と、新たに伝統的建造物および石垣群を有する中座地区を新たに候補として抽出した。今後詳細な調査を実施し、専門的に検討を行っていく必要がある。

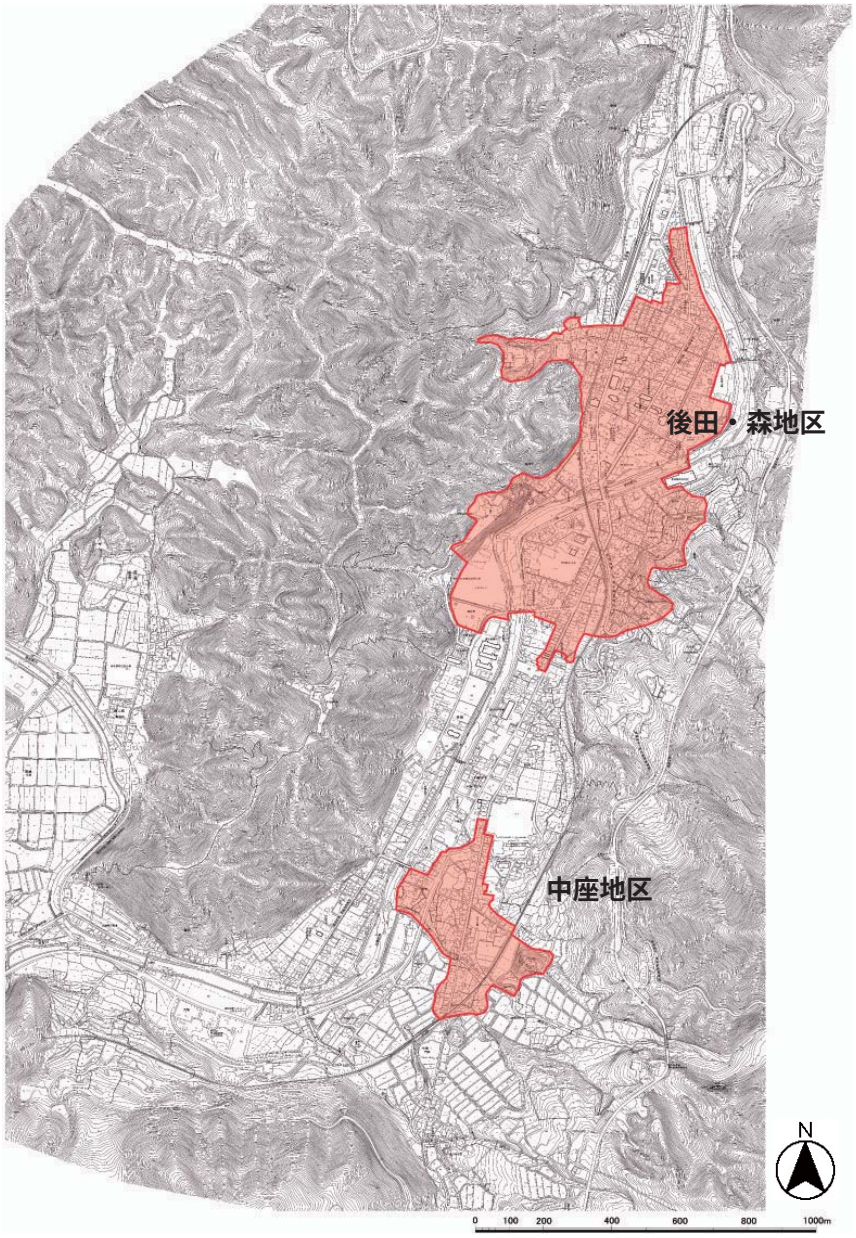


図0-2-22　城下町における伝統的建造物群保存対象地区

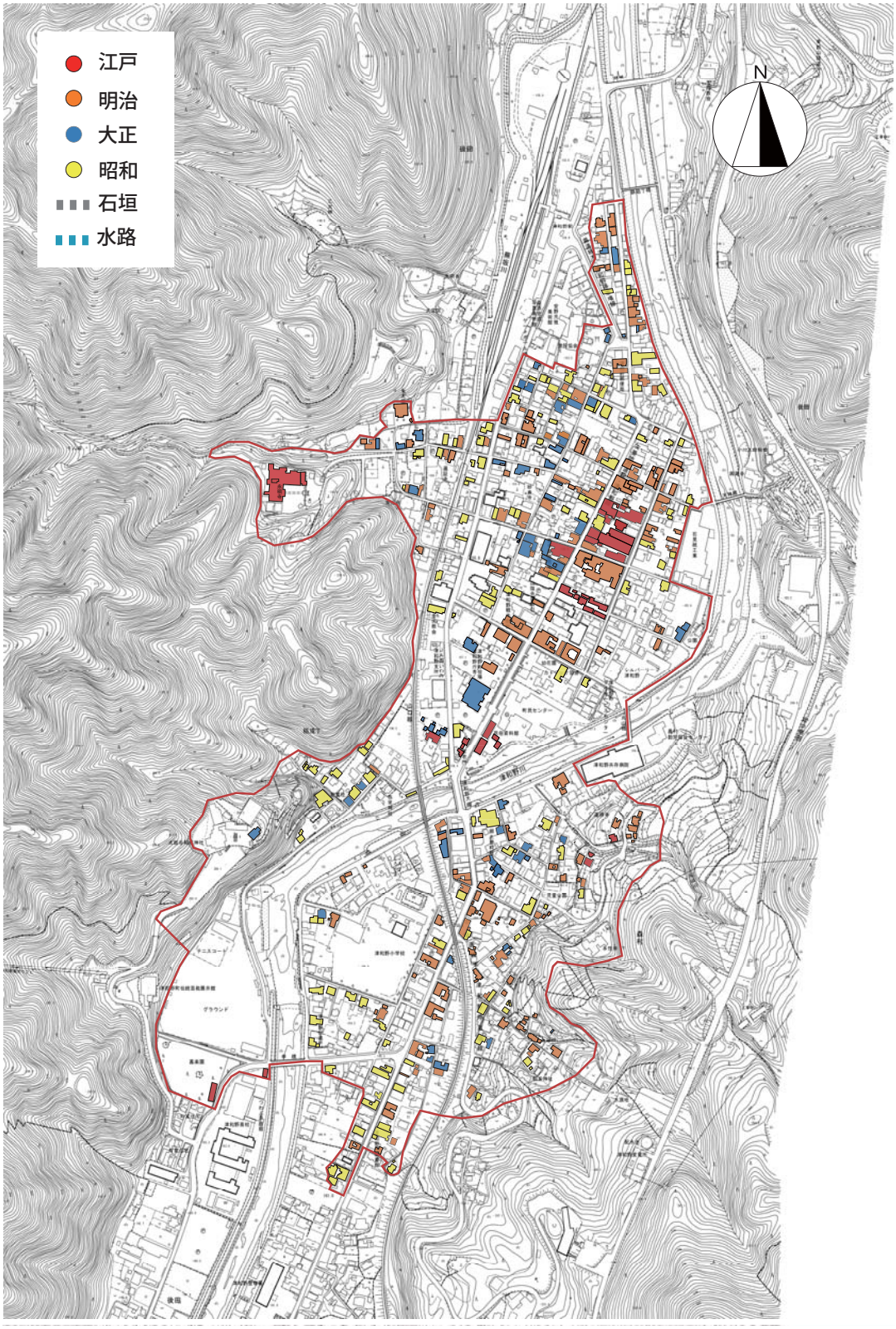


図0-2-23　後田・森地区



殿町通り



本町通り



万町通り



新丁通り



魚町通り



今市通り

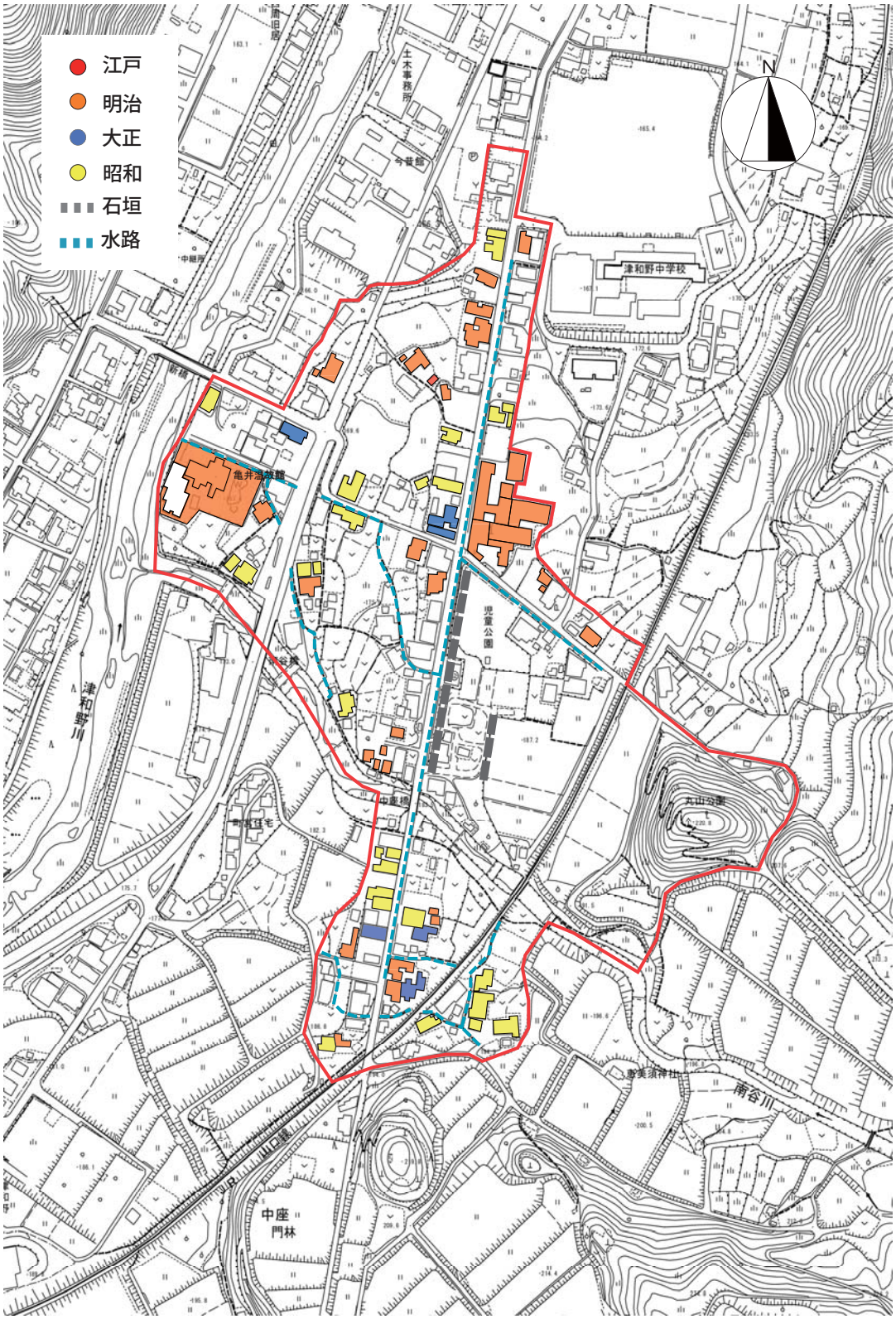


図0-2-24　中座地区



小坂通り



高崎亀井家跡（山陰道沿い）



高崎亀井家跡（参勤交代道沿い）



新橋通り



山陰道沿い



亀井別邸

（7） 文化財の保存技術

津和野藩は４万３千石の小藩でありながら、和紙の生産を奨励し、大阪の紙問屋へ多くの和紙を出荷、石高に換算すると15万石にも匹敵したと言われた。また、蝋の生産にも取り組み、蝋座制を引くなど江戸期は産業の振興にも積極的であった。しかし、明治以降、海外からの原料の輸入により、次第に生産量も職人の数も減っていった。唯一藤井家（登録有形文化財）に蝋板場が保存されている。

また、養蚕業も盛んで、農村部のほとんどの農家では納屋を利用して蚕を飼っていたという。喜時雨地区には養蚕のための施設が今でも残されている。また、日原の水津家は青野山や白糸の滝付近にあった風穴を利用して蚕の幼虫を飼育するなど、地域を挙げて養蚕業に取り組んでいた。日原地区では生糸の生産のための会社「石西社」が平成10年まで存続し、生産機械なども残されていたが、現在は建物含めすべて取り壊されてしまった。調査によって、こうした過去の生産技術についてはうかがい知ることはできたが、観光用に紙漉き体験などが残るだけで、文化財としての技術の継承は行われていない。

なお、炭焼きや竹細工、アユ漁のための舟づくりなどの一般生活用のための生産技術や、江戸時代から盛んな和菓子の「源氏巻」の製造技術については伝統的な焼き方が継承されており、戦後に特産品となった和紙人形づくりも今後継承されていくべき技術であろう。



養蚕場跡



藤井家蝋板場



和紙人形づくり



源氏巻づくり

（8） 埋蔵文化財

これまでに行われた踏査、発掘調査などから、数多くの遺跡が確認されてきており、中には津和野の形成上重要な遺跡がいくつか発見されている。これらの遺跡については平成17年度と21年度において『津和野町遺跡地図』としてまとめている。今回実施した総合的把握事業でも基礎資料とし、新に発見された遺跡はこの遺跡地図に追加した。

縄文時代においては、草創期の遺跡である山崎遺跡をはじめ、高田遺跡や大蔭遺跡などである。これらの縄文時代の遺跡は津和野の確認できる歴史としては古い時代のものである。弥生時代においては、横瀬遺跡、高田遺跡や大蔭遺跡などがある。これらの遺跡の内、特に高田遺跡と大蔭遺跡においては、津和野においての縄文から弥生時代にかけての重要な遺跡であると考えられ、出土遺物と合わせて遺跡全体の調査及び保護の対象とする必要がある。



大蔭遺跡（縄文時代の住居跡）



大蔭遺跡出土遺物（縄文時代の住居跡）



大蔭遺跡出土遺物（縄文時代の住居跡）

古墳時代の遺跡としては、狐尾遺跡、中原遺跡などが確認されている。また、古墳として鍛冶原古墳群、社地脇古墳の２ヶ所のみが確認されているだけである。そのため、古墳時代については分からない点が多く、今後の調査等を実施する必要がある。

奈良・平安期の遺跡としては、大婦け遺跡、野広遺跡、直地遺跡などがある。この時代についても古墳時代と同様に確認されている遺跡が少ないことから、今後の調査が必要である。



大婦け遺跡（奈良・平安時代）

また、鎌倉時代から室町時代になると、吉見氏が最初に入部した地である木薗遺跡（舘跡、池、墓所など）が町指定史跡となっている。その他にも発掘調査で明らかになってきた津和野城の旧大手側である喜時雨遺跡や、吉見氏の館跡であると思われる高田遺跡などが調査されてきているが、その全貌が明らかになったわけではないため、今後さらに調査を進め保護の対象とする必要がある。

江戸時代の遺跡としては、津和野城下町遺跡をはじめ枕瀬代官所跡や青原代官所跡などがある。特に城下町遺跡については、鷲原八幡宮および流鏑馬馬場と山陰道野坂峠越の口屋番所に至る区域全域を「周知の遺跡」として平成16年度に面的に保存することと（前述）なった。これまでの発掘調査などから近世の遺跡が良好に残るとともに、幸いにも城下絵図や津和野百景図といった歴史資料なども良好に残されており、城下町史跡群とともに保存すべき国内でも類例のない貴重な遺跡である。今後の保存のあり方について景観条例や都市計画マスタープランとの整合性を取りながら総合的に検討し、保存のための条例化を進めていく必要がある。また、登録有形文化財が建築後50年以上の建物を対象としていることなどから、明治以降の遺構をどのように保存していくかということも今後の課題となる。



城下町遺跡（江戸時代）

以上のように津和野町全体における遺跡の状況を述べたが、中でも特に特徴ある遺跡のあり方として津和野城下町遺跡の周辺に多くの時代の遺跡が集中している点が上げられる。僅か３㎞四方の区域に旧石器時代から江戸期の城下町遺跡まで連続して確認されている例は全国的にも無いと思われる。そのため、この区域においては、重要になる遺跡（高田遺跡・大蔭遺跡・喜時雨遺跡）については、出土遺物と合わせて将来的に文化財指定も念頭におく必要がある。

さらに、平成18年度に行われた山陰道野坂峠越の発掘調査で、街道に係る遺構が良好に残されていることが判明したことから、平成20年度において鳥取県の蒲生峠越の追加指定として国指定史跡となった。今後も断続的に調査を実施し、合わせて奥筋往還道や廿日市街道など関連する当時の街道についても調査、保護に努める必要がある。

表0-2-15　町内遺跡リスト（地域別）　１／２

地区	遺跡名	住　所	時代区分							
			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良･平安	鎌倉	室町	江戸
木部地区	土井原遺跡	山　下		■	■		■	■	■	
	延吉遺跡	長　福		■	■		■	■	■	
	土居丸館跡	長　福		■	■			■	■	
	奥ケ野遺跡	中　山		■	■			■	■	
	西迫金焼遺跡	長　福		■	■					
	西迫尻遺跡	長　福		■	■					
	原崎遺跡	中　川		■	■					
	黒岩遺跡	中　山		■						
	長野遺跡	長　福			■	■				
	人形溢遺跡	中曽野			■					
	木部中学校校庭遺跡	中　川			■					
	本郷遺跡	長　福				■	■	■	■	
	鳶の子遺跡	長　福				■				
	鍛冶原古墳群	中曽野				■				
	殿畠遺跡	中　山					■	■	■	■
	福谷金焼遺跡	長　福					■	■	■	■
	黒杭遺跡	山　下					■	■	■	■
	有福寺遺跡	中曽野					■	■	■	
	平野遺跡	中　川					■	■	■	
	小野遺跡	中曽野					■	■	■	
	海東寺遺跡	吹　野					■	■	■	
	椿土井遺跡	吹　野					■	■	■	
	下横屋遺跡	山　下					■	■	■	
	四本松遺跡	山　下					■	■	■	
	川尻遺跡	山　下					■	■	■	
	有福寺跡遺跡	中曽野						■	■	
	木薗遺跡	中曽野						■	■	
	吉見氏館跡	中曽野						■		
	中組遺跡	中曽野							■	■
畑迫地区	喜時雨遺跡	田二穂	■		■	■	■	■	■	■
	高田遺跡	高　田		■	■	■	■	■	■	■
	神田ケ隘遺跡	中曽野		■	■					
	大原遺跡	部　栄		■						
	牧ケ野遺跡	高　峯			■			■	■	
	横瀬遺跡	部　栄			■					
	山入遺跡	田二穂			■					
	向中原遺跡	高　峯				■	■	■	■	
	中原遺跡	田二穂				■	■			
	畑迫遺跡	邑　輝					■	■	■	■
	大婦け遺跡	中　川					■			
	出合的場遺跡	邑　輝						■	■	
	殿河内遺跡	邑　輝						■	■	
	寺ケ台前田遺跡	邑　輝						■	■	
津和野地区	大蔭遺跡	鷲　原		■	■	■	■			
	山崎遺跡	中　座		■	■	■				
	仿僧原遺跡	中　座		■	■					
	元山遺跡	中　座		■	■					
	門林遺跡	中　座		■	■					
	東中組遺跡	中　座		■	■					
	石田遺跡	中　座		■	■					
	上ノ山遺跡	中　座		■						
	津和野城下町遺跡	後田他			■	■	■	■	■	■

表0-2-15　町内遺跡リスト（地域別）　２／２

地区	遺跡名	住所	時代区分							
			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良･平安	鎌倉	室町	江戸
津和野地区	丸山遺跡	森　村			■					
	観音平遺跡	中　座			■					
	西中組遺跡	中　座			■					
	畦田遺跡	森　村				■	■			
	森遺跡	森　村				■				
	狐尾遺跡	中　座				■				
	桂川遺跡	中　座					■			
	山根遺跡	後　田					■			
	五十田遺跡	中　座						■	■	
小川地区	和田遺跡	耕　田		■	■			■	■	
	日浦遺跡	商　人		■	■					
	直地遺跡	直　地		■	■					
	権道路遺跡	笹　山		■	■					
	下寺田遺跡	寺　田		■	■					
	野広遺跡	直　地			■	■	■	■	■	
	亀田遺跡	耕　田					■	■	■	
	下千原遺跡	寺　田							■	
	上寺田遺跡	寺　田							■	
日原地区	萬世溢遺跡	枕　瀬		■	■	■			■	
	枕瀬遺跡	枕　瀬		■	■					
	日原遺跡	日　原		■						
	須川行旧道筋遺跡	日　原		■						
	倉地遺跡	滝　元			■					
	三渡馬場筋遺跡	池　村			■					
	社地脇古墳	池　村				■				
青原地区	鋳物地遺跡	青　原		■	■			■		■
	寺の前遺跡	青　原		■	■					
	柿木田遺跡	柳　村		■					■	■
	青原代官屋敷遺跡	青　原				■				
	久田遺跡	添　谷							■	
	青原代官所跡	青　原								■
	御茶屋床上遺跡	青　原								■
左鐙地区	島遺跡	左　鐙		■						
	龍谷釿跡	左　鐙								■
	高嶺釿跡	左　鐙								■
	横道釿跡	左　鐙								■
	福谷釿跡	左　鐙								■
	猪退谷釿跡	左　鐙								■
	中内谷釿跡	左　鐙								■
	新畑釿跡	左　鐙								■
	どるぶち釿跡	左　鐙								■
	上ケ原釿跡	左　鐙								■
	成日照釿跡	左　鐙								■
	かじや谷釿跡	左　鐙								■
	桜ケ原釿跡	左　鐙								■
須川地区	出合釿跡	相撲ケ原								■
	赤石釿跡	相撲ケ原								■
全域	山陰道	町　内						■	■	■
	津和野奥筋往還	町　内								■